

T ● Y ● T A B L E A N T F ● R U M

トヨタ・エイブルアート・フォーラム総合セッション 講演録

アートは社会の未来への投資

新しい価値の創造における市民社会と企業のコラボレーション

T ● Y ● T A A B L E A R T F ● R U M

トヨタ・エイブルアート・フォーラム総合セッション 講演録

アートは社会の未来への投資

新しい価値の創造にむけて・市民社会と企業のコラボレーション

エイブル・アート・ジャパン

混沌の時代をさまよう現在の日本は、高度経済成長をとげている間に、芸術・文化を切り捨ててきました。そのために人間と人間、人間と自然、人間と社会といったあらゆる側面のつながりが分断され、その結果、社会全体に連帶の精神が失われ、人びとの孤立化がすすみ、活力がなくなつていきました。

しかし、こうした日本で、芸術や文化のもつポテンシャルの見直しがはじまっています。そのひとつが、アートには人間が生きていくことを助ける役割があるということです。つまり、現代のアートには社会全体を幸福にするという重要な目的があるのです。このような考えのもとに、エイブル・アート・ムーブメントは考え出されました。

エイブル・アートは「障害者アート」のことと見られがちですが、本来の意味は新しい文化をつくり出す市民の自律的な力をさしています。そして、そのミッション（目的）は「人間を幸福にする」ことで、そのためのアートの役割を見せていくことです。

「エイブル・アート」ということばが生まれた一九九五年は、日本はバブル経済がはじけ、社会全体の意識や価値観に変化のきざしがみえはじめたときでした。これまでのように、ものにおいて成長をとげることよりも、知性や感性や魂の深さにおいて成長をとげることが重要だと考える人びとが生まれつつあつたといえます。

そこで、わたしたちは、エイブル・アートの最初の試みとして、美術的に価値が低いものとされてきた「障害者アート」を新しい視座で見直すことを行いました。一九九五年の秋に大阪で「エイブル・アート・フェスティバル95」を開催し、障害のある人の表現活動を新しいアートとして社会に提示したのです。

このフェスティバルの開催をきっかけに、私たちはたくさんの企業とコラボレーションをする機会を得ました。そのひとつにトヨタ自動車との出会いがあつたのです。障害のある人たちの多様な表現活動が各地ではじまること、そのことを通じて一人ひとりが尊厳を持つて生きてゆける社会を創ることを目的に「トヨタ・エイブルアート・フォーラム」が一九九六年三月からはじまつたのです。この七年間に北海道から沖縄まで全国三十四都市で六十三回のプログラムを実施してきました。一年目のシンポジウム、二年目のワークショップに統いて、三年目には各地で自主企画を実施するなど、継続的かつ進化するプログラムを提供してきました。

七年の間に各地に多様な取り組みが生まれ、それぞれが新しい動きを始めています。同時に、エイブル・アート・マーブメントの役割も「障害者アート」から「芸術の社会化・社会の芸術化」へと広く展開する時期を迎えた。そこで、この節目の時期に「トヨタ・エイブルアート・フォーラム総合セッション」を開催し、これまでの取り組みを確認し、未来への創造的な議論をする場をつくりました。このたび、講演録というかたちで、当日の熱気を皆さんと共有できることは大きな喜びです。関係するすべての方に感謝申し上げます。

トヨタ自動車株式会社 常務役員 金田 新

トヨタ自動車とエイブル・アートの関わりは、一九九四年に遡ります。京都の「みずのき」の展覧会をきっかけに、エイブル・アート関連の展覧会支援に取り組みはじめました。一九九六年からは、エイブル・アート・ジャパンと各地実行委員会の協力のもとトヨタ・エイブルアート・フォーラムを開催しています。

フォーラムはこれまでに、三十四都市、六十三回開催いたしました。その結果、全国各地に多様な活動が生まれてきました。これも、エイブル・アート・ジャパン、各地の実行委員会の方々、また、各フォーラムにご協力いただいた方々の厚い情熱とご尽力の賜物だと思っております。この場を借りまして心から御礼を申し上げます。ここで、フォーラム開始以来の七年間、あるいはそれ以前から取り組まれてきたさまざまな活動を紹介し、その軌跡を振り返り、今後の展望についての議論を深めていただきたいと思います。

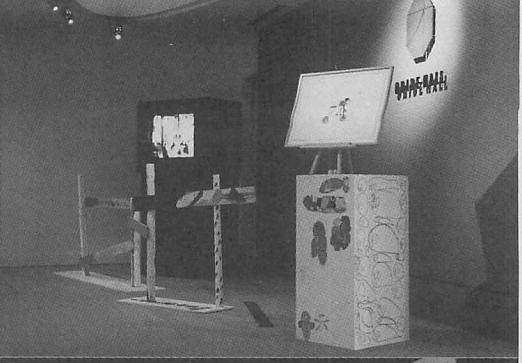
私どもがこの活動を始めました一九九六年当時と比べますと、エイブル・アート・ムーブメントを取り巻く環境も大きく変化しています。昨今では障害者アートの映画も上映されるなど、このような活動が一般に認知されてきているのが状況ではないでしょうか。

私事にわたりますが、以前、宮城県に住む障害のある中学生が描いた自動車の絵に接したことがあります。その時に、オーストリアの芸術家フンデルト・ワツサー（日本名・豊和百水 一九二八～二〇〇〇）のことを思い出しました。彼は「人間には五つの皮膚がある」という言葉を残しています。五つとは、第一には、自分の持っている皮膚が挙げられます。第二には、着るもの、纏うもの。第三には、家（ファミリー）です。第四には、国や町などの地域コミュニティ。その先の第五に、環境や宇宙があるのだと彼は述べています。

彼の言葉を借りれば、家と社会の中間に自動車が位置します。そのことを思い浮かべて、自動車の絵を描いた少年に接したわけです。大変強烈な衝撃を受けました。百水にも自動車をテーマにした絵は多いのですが、百水よりも少年の絵のほうが訴えかける力が強烈だったのです。

それ以来、なぜ、百水よりもインパクトが強いのかと疑問に思うようになりました。しばらくして、その少年のお父さんが自動車関係のお仕事をされているのがわかりました。つまり、絵を描いた当時の少年の心は、父親や家族に対する思いが非常に溢れ出ていたのです。それで、同じテーマを描いたものでありながら、訴えかける力が違つたのではないでしょうか。この経験から「エイブル・アートは、心の芸術である」と認識するようになりました。

実践とは心を探る一つのプロセスです。このフォーラムを通じ、何人かの社員たちは、大変な勉強をし、影響も受けました。二〇〇三年度でこのフォーラムは最後となりますが、長年この活動に尽力された方々に、アメリカの詩人ラルフ・ウォルト・エマソン（一八〇三～一八八八）の言葉「私の過去に起こったこと、私の将来に起ること、それはいまの私の心にあるものに比べれば、小さいことである」を贈ります。今後はみなさまから得たエネルギーを社業に反映させていただくとともに、このムーブメントが各地でさらに活性化することを願っています。





目次

じあいさつ

エイブル・アート・ジャパン…………… 2

トヨタ自動車株式会社…………… 4

1 部

リレートーク

エイブル・アート・ムーブメントで何が起こったか

浜松・知的障害児者クリエイティブサポートレツツ

障害のある子どもたちの可能性を拓くために…………… 久保田 翠

橋本・もうひとつの美術館

障害のある人と社会を結ぶ美術館をめざして…………… 梶原紀子 18

網走・アートキユーブ

オホーツクでの障害者アートの土壤づくりとして…………… 宮田美光 24

岡山・ハート・アート・おかやま

インディペンデントワークショップから地域に根ざしたアートセンターへ…………… 田野智子 30

東京・子どもとアート研究会

アートの本質を児童たちと一緒に楽しむ…………… 井ノ口和子 36

宮崎・アートステーションどんこや

人が生きいき生活していくヒントをアートを通して伝えたい…………… 高橋夏樹 42

エイブル・アート・ムーブメントを考える

アートの視点から

参加するアート「エイブル・アート」のなかから.....長田謙

50

社会学の視点から

市民社会とアート.....栗原 彰

58

行政の視点から

文化行政とエイブル・アート.....上西利一郎

66

文化政策の視点から

地域文化の創造.....西尾真治

72

3部

トータル・ディスカッション

新しい知と、新しい美を語る

田野智子+上西利一郎+栗原 彰+西尾真治+長田謙+播磨靖夫

88

トヨタ・エイブルアート・フォーラムの概要と軌跡.....
110

本書は、2003年3月15日(土)、東京・六本木「オリベホール」にて行われた、トヨタ・エイブルアート・フォーラム総合セッション「アートは社会の未来への投資」(主催=トヨタ自動車株式会社、エイブル・アート・ジャパン、後援=東京都トヨタ販売会社グループ)の講演内容を収載したものです。

エイブル・アート・ムーブメントで 何が起こったか

トヨタ・エイブルアート・フォーラムなどを通じて、各地でどのような取り組みが始まり、何が起こったのでしょうか。これまでの軌跡と変化について、市民による多様な取り組みから六つの特徴的な事例を紹介します。

- | | |
|-------|---------------------------|
| 久保田 翠 | (浜松・知的障害児者クリエイティブサポートレツツ) |
| 梶原 紀子 | (栃木・もうひとつの美術館) |
| 宮田 美光 | (網走・アートキュー ^ブ) |
| 田野智子 | (岡山・ハート・アート・おかやま) |
| 井ノ口和子 | (東京・子どもとアート研究会) |
| 高橋 夏樹 | (宮崎・アートステーションどんこや) |

障害のある子どもたちの可能性を拓くために

久保田 翠

くぼだみさる

(知的障害児者クリエイティブサポートレツツ代表)



レツツの設立

知的障害児者クリエイティブサポートレツツ（以下、レツツと略）は、静岡県浜松市において、知的障害児の支援を中心に活動しています。レツツの設立は、私がトヨタ・エイブルアート・フォーラム神奈川に参加したことがきっかけとなりました。私には、小学校五年生の健常児の子どものほかに、小学校一年生の障害のある子ど

もがいます。二人めの子どもは養護学校に通っています。

私は、一人めの子どもが生まれるまで建築設計の仕事をしていました。ところが、障害児を生んだことによって、子どもを保育園にあずけられない、学童保育も無理、両親がそばに住んでいない私にとっては、まったく仕事ができない状況に陥りました。そのときに、市役所やさまざまな機関に障害児を抱える家庭に対する支援の改善策を申し出ました。しかし、浜松市においては、障害児を抱える女性が自立して仕事をするという姿がまったく



シンボルマークである「レッツ君」。レッツに通うヤンチャな「いたずら坊主」をイメージして作成された。

イメージなく、結局、仕事ができない状況は改善されませんでした。

打開策を見つけるためにも、同じような境遇の方たちと勉強会を立ち上げました。障害児を抱える親たちを取り巻く環境を調べてみると、障害のある子どもたちが幸せな生活を送れていながら現実でした。具体的にいうと、障害のある子どもは学校と家庭以外に活動ができる場所がほとんどなく、面倒を見てくるのも親ばかりです。また、親も子どもの送り迎えに一生を終えるという生活を強いられます。障害のある子どもを抱える母親たちは、自分の子どもが幸せでないが故に、自らが社会に参加し、社会で自立していくという姿をイメージすることができません。

困り果てていたときに、偶然、トヨタ・エイブルアーラ



アトリエがある「レッツチャレンジャーハウス」で行われた造形ワークショップの一風景。絵の具にまみれながらビニールシート一面にペイントした。

ト・フォーラム神奈川の案内を知人からもらい、藁をもすがる思いで見に行きました。当初、フォーラムが福祉とアートを結びつけるものであることは理解していましたが、福祉の面に重点を置いた内容になるのではないかと思っていました。ところが、フォーラムでの話を聞いてみると、眼からウロコが落ちるほどの衝撃を受けました。というのは、こんなにもたのしい福祉がこの世の中に存在し、そこで障害のある人が生き生きとアート活動をしているではありませんか。そして、それが障害のある人にとって自立の道、その人の生き方を確立していく道につながっていると

いう現実をフォーラムを通して初めて知ることができ

たのです。これなら私もできる、私にも手伝えるかもしないという思いで、帰りの新幹線に飛び乗りました。横浜から浜松までの約二時間の新幹線のなかで企画書を書き上げ、その後一ヶ月のうちにワープロ原稿約三十枚の企画書に仕上げました。それ以降は、浜松市役所、県庁、そして各関係団体に配つてまわりました。そして、仲間を募り、レッツ誕生させました。

アートを基軸にした活動

二〇〇〇年三月、トヨタ・エイブルアート・フォーラム神奈川が開催され、知的障害児者クリエイティブサポートレッツを設立したのは一ヶ月後の四月です。さらに設立から半年後の十月、専用の施設に移りました。拠点を持ち本格的な活動を始める際、私たちが最初に考えたことは、「アートを機軸にしよう」「障害のあるなしに関わらず、さまざまな人たちが町のなかで生きいきできるように支えていこう」という思いを込めて「知的障害児

者クリエイティブサポートレッツ」と命名しました。入会の条件として、障害のある人自身だけでなく、その家族の方にも同時に会員になつていただいています。何故かといえば、家族も一緒に活動に参加することで、障害のある人の新しい可能性を客観的に感じられるという効果があるからです。

現在、八十の家族会員、三十の個人会員、百人の賛助会員、十の団体会員が在籍しています。レッツの活動を予算面からみると、会費及び寄付が二百万円、絵・音楽・パーカッショニ・陶芸・英語などの講座収入が百万円、トヨタ自動車などからの助成金で百万円ほどの収入があります。約四百万円の低予算で活動している団体です。この予算では、家賃を払つて施設を借りることは非常に困難です。幸い、レッツの場合、会員の方が無償で貸与してくださる施設を使うことができていますので、少ない予算でも活動できるという現状です。

設立直後に、エイブル・アート・ジャパンから、浜松においてトヨタ・エイブルアート・フォーラムの開催の

打診がありました。二〇〇二年度は、レッツが立ち上がり翌年のことでしたが、とにかくフォーラムの告知活動に力を注ぎました。

残念なことに、地方都市である浜松では、ほとんどエイブル・アートという言葉は知られていませんでした。そこに、障害者のアートというキーワードを持ち込んでもなかなか理解してもらえない。また、浜松市は福祉施設が充実している地域です。行政側にも福祉に対する固定したイメージが根強くありました。そこをまず打ち砕くにはどうしていいのでしょうか。そこ

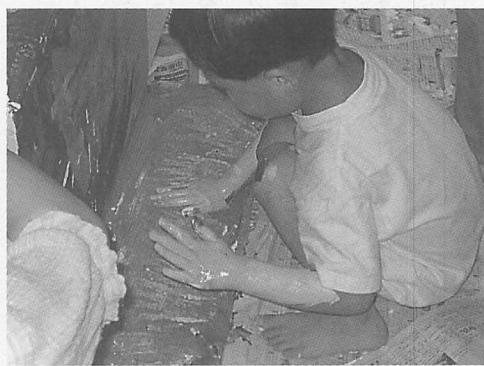
で、私たちは、トヨタ自動車、エイブル・アート、障害者の三つの結びつきを重要視しました。この結びつきが、さまざまな人々に福祉へのイメージを変えることになったようです。というのは、まず、障害者とアートという結びつきが地元の人々にとって新鮮なのです。さらに、エイブル・アートの名前すら知らない人々にとっても、トヨタ自動車は、誰もが知っている企業です。活動を進める上で、これらのこと非常に効果的でした。一年間でさまざまな告知活動をした結果、地元の中日新聞をはじめ、静岡新聞、読売新聞、毎日新聞、朝日新聞などが



自由な創作が子どもたちの喜びにつながるという思いから、危険でない限り活動の規制はない。



切ることや貼ることが好きな子どもは、絵だけでなく折り紙とはさみでポスターをつくることもある。



「好きなことをおもいっきり」をコンセプトにしているアート講座の風景。子どもたちは、肌に絵の具を塗る感触が気持ちいいようだ。



制作終了後はメンバーたちと記念写真を撮影。メンバーたちの笑顔が創作の楽しさを物語っている。

らの取材を受けることができました。

告知した甲斐もあり、二〇〇二年三月のフォーラムには約二百人の参加者があり、三十人の子どもたちの託児を行うほどでした。延べ百人のボランティアの参加もあり、盛況なフォーラムを開くことができました。このことは、「かっこいい」という先進性と、今までの福祉とは異なるというイメージづくりが功を奏したと分析しています。

トヨタ・エイブルアート・フォーラムの二年目の企画として、二〇〇三年二月十五、十六日にワークショップを開催しました。これは、レツツが子どものことを中心に活動していることを主眼におき、「学校を変えていく」というテーマに基づいて展開しました。さまざまな養護学校の先生、発達学級の先生など教育に携わる方々にも参加していただき、内容の濃いディスカッションができたと思います。私たちにとっては、有意義な時を過ごすことができました。

二〇〇三年度、知的障害児者クリエイティブサポートレツツは、トヨタ・エイブルアート・フォーラムの三年めの支援として自主企画の年を迎えます。今後、経済的にある程度自立しなければならないことを考えると、企業や行政とのコラボレーションという視点は欠かすことできません。特に、トヨタ自動車とは二年間の良いお付き合いができました。これをきっかけに、地元のトヨ

今後の課題

タ自動車販売会社ともネットワークを結んでいきたいと 思います。

今のところ、施設は無償で借りることができます が、今後は活動の拠点の場所探しを含め、家賃の捻出など厳しい状況に直面していかなければなりません。経済的な援助のほか、人材や場所などの支援もさまざまな方にお願いしなければなりません。トヨタ・エイブルアート・フォーラムを一つの学習材料として、浜松にある企業にもアプローチをしていかなければならぬでしょ う。レツツの活動が、潰れることなく、生き続けること が障害のある子どもたちの将来や可能性を拓くことにな るのですから。



パーカッション講座では思い思いの楽器を使ってリズムを きざむ。



音楽ワークショップでは、どんな子どもでも音楽を合奏する喜びを味わえる。聞くだけでも演奏してもOKのフリースタイルである。

障害のある人と 社会を結ぶ美術館をめざして

梶原 紀子

かじはら のりこ

(もうひとつの美術館館長)



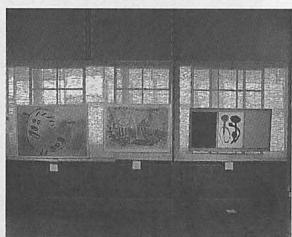
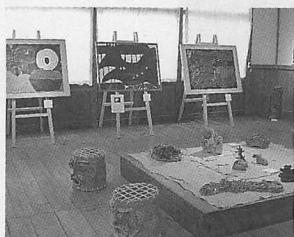
美術館設立の経緯

もうひとつの中の美術館は、二〇〇一年八月四日に開館しました。同年三月に、廃校になつた明治・大正時代に建てられた元小口小学校校舎を栃木県馬頭町から借り受け、障害のある人のアート作品の企画展示を目的に活動しています。

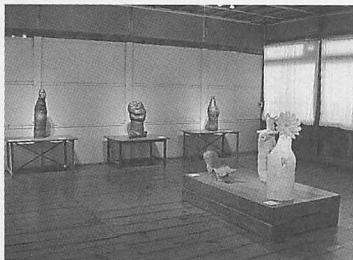
つたものです。一九九八年に東京から馬頭に移住しましたが、移り住むことになつたのも障害のある人の作品と出合つたことからでした。次男が自閉症だということがわかり、この子をどう育てようかと悩んでいたときで



もうひとつの美術館は、廃校となつた木造平屋建ての校舎を利用して活動している。



展示風景。上段3点とも2001年「いきものikiiki」。下段2001年「ワンダー・アート・コンテスト」(右)、2002年「西から来た妖精たち」(中・左)。



展示風景



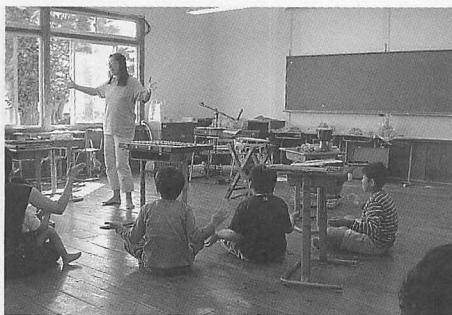
写真は、2001年「ワンダー・アート・コンテスト」入選作品巡回展（上）、2002年「舛次崇と仲間たち」（下）、2002年「西から来た妖精たち」（右）の展示風景。



した。自分たちのできるところからしようと思いつ、自然環境のよい馬頭に移住しました。

そして、一九九九年春の展示「このアートで元気になる」と、映画「まひるのほし」を見て、衝撃が走りました。それまで知らなかつた「アート」と出合つてしまつたからです。それは、全国各地で生まれている、障害のある人が創り出したアート。既成概念のない、本来アートのもつ根源的な生命力にあふれていきました。強力なエネルギーをもつてているにもかかわらず、美術館のような、多くの人が見ることのできる展示までには実に多くの協力者、援助者が必要となります。そして、展示という発表の場がないと、一般の人には彼らと出会う機会がないということがわかりました。自分には何ができるかわからないけれど、自分も何かしたい、そう思いました。

同年（一九九九）の六月頃に、馬頭町のなかで何校かの小学校の統廃合の話が持ち上がりしました。馬頭町は過疎の地域であり、少子化の影響を受けたのです。そのとき、夫婦一人でひらめきました。「廃校になってしまつ



上の写真2点は岡倉ゆかり氏による「音のワークショップ」。

下は柿沼康二氏による「書のスペシャルワークショップ」。

た小学校校舎を使って、障害のある人の美術館をつくる
う」と。会う人会う人に、さまざまな分野の人々に話を
持ち掛けました。そして、もっと情報を収集しよう、も
っと勉強をしようと思うようになりました。

そんなときに、「トヨタ・エイブルアート・フォーラム」
があることを知り、私は現在も活動を一緒にしてい
る仲間と何度か参加しました。そのときは、作家さんと
も知らずに一緒にワークショップに参加したこともあります。
貴重な体験をさせてもらいました。そしてそれぞ
れ立場は違うけれども、活動をすでにしている人、これ
からしようとしている人、さまざまな人と出会うことが
できました。

そして、二〇〇〇年四月に、もうひとつの中学校設立
準備会を七名で立ち上げました。同年（二〇〇〇）七月
には、同じく廃校となつた元矢又小学校の校舎でサマー
フォーラムを行いました（現在のもうひとつの中学校の
建物ではなく、校舎はすでに取り壊されています）。作
品展示だけでなく、映画「まひるのほし」の上映や各方
面から四名のパネリストを招き、パネルディスカッション
も開催しました。このフォーラムが好評であったこと
が実績として認められ、二〇〇一年六月に元小口小学校
(同年三月に廃校) を借りることができました。直ちに、



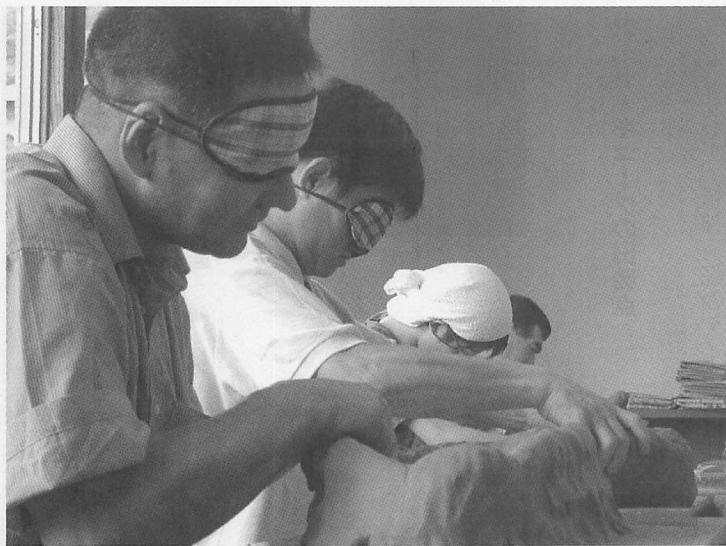
2002年、近藤ヒロミカリンバコンサート。

設立準備会のメンバーを中心に校舎の改修作業に取りかかり、二ヶ月後の八月四日に美術館が誕生しました。

活動の内容と目的

春夏秋と年三回企画しています作品展示（冬は閉館）、毎月行う絵・音・土・ダンスなどのワークショップ、年数回行うフォーラムや音楽会などのイベント、年二～三回MB通信の発行をしています。現在二百四十五名の会員があり、運営資金は入館料の他に会員の会費と寄付、企業からの寄付や協賛などの資金によって賄われています。二〇〇二年度は、トヨタ自動車や芸術文化振興基金からの援助をいただきました。美術館運営には目に見えないところで、多くの資金と支援が必要です。セキュリティや作品の輸送・保険など形に表れないところでも援助をしていただきたいところです。

障害のある人たちと社会をアートで結ぶことが、美術館の目的です。ハンディキャップのある人たちが生み出



2001年、西村陽平氏によるアイマスクをしての土のワークショップ。

一人でも多くのさまざまな方に作品を見てもらいたい、そして感じ方はそれぞれ違うとは思いますが、何かを感じ取ってもらいたい。社会には、障害のない人と障害のある人の間に確実にバリアがあります。そのバリアを少しでも低くしたい、無くしていく方向にこの美術館が役に立つことを願っています。

す作品など、オルタナティブなアートとの出会いの場、サポートをする場をつくり、アート本来の力によつて障害の有無や年齢に関係なく、人と人との結びつき、誰もが人の可能性、自分の可能性を見出していく、そんな新しい出会いの場をめざしています。



2002年、障害のある人たちとのアート活動をする方々を招いてのギャラリートーク。

オホーツクでの 障害者アートの土壤づくりとして

宮田 美光

みやたよしむる

(アート・キューブ代表)



アート・キューブの出発点

一九九六年、精神病院のデイケアに通所していたメンバーのなかで、絵の好きな仲間が集まり絵画クラブができました。それまで、絵など一つもなかつた病院の廊下や待合室の壁面が三年間の活動のなかでたくさんの絵でうめ尽くされました。メンバーたちは「もっと多くの人たちに見てもらいたい!」、と作品展示の場を求めて病

院外の地域へと活動をうつすことを考えるようになります。病院内のデイケアとしての活動では、材料費などの経費やスタッフの制約があります。そういう意味では、病院は表現活動に不自由な場所でした。

地域へと活動の場をうつすと同時に、空き店舗を利用した作品展も試みました。多くの地域の人々にとつて精神病院のこうした作品展を初めて見たということもあり、非常に大きな話題となりました。このことが多方面からさまざまな反響を呼び、美術館や隣町での展覧会開

催の機会に恵まれました。メンバーたちが美術館で展覧会を行うことに対して、病院側は大きな壁となつたのですが、周囲の評価や協力があつて実現することができたのです。

美術館での展覧会開催が達成され、今後どのような展開を図ればよいか悩んでいたところ、奈良県のたんぽぽの家やエイブル・アート・ジャパンの活動を知ったのです。

病院から地域のなかへ

資金や施設、活動に使う道具すらない状態で、私たち

です。エイブル・アート・ジャパンのような活動は私たちにも行えるのではないか、と一九九九年、アート・キューブの前身となる網走障害者芸術文化協会を発足しました。



アトリエでの書道の時間。メンバー誰もが自分の好きな言葉を選んで書く。



「愛し合っているコワーイ」。何が怖いのかと聞くと、女性に追いかけられるのが怖いそうだ。



飲むことを禁止されているアルコールであるが、アトリエでは我慢なんてもいい。

の存在を認識してもらうにはどうしたらよいのでしょうか。暗中模索の結果、使い捨てカメラを使って、町のなかを撮影しました。自分たちの住んでいる町がどういった町なのかを再認識しようという試みです。そのときに撮った作品をもとに写真展を開きました。網走市は観光地の一つですが、観光写真ばかりでなく、網走に生きる人々の普段の生活を写すことも大切である、とのきに気付くことができました。網走の写真を撮ることは、これ以降、年に幾度も行っています。

四季それぞれの美しい網走の風景の写真を集めてフォトスケッチ展も開きました。何気ない町の風景写真ですが、町の人々に非常に好感を持ってもらえて、反響を呼びました。私自身は気に入っています。

こういった地域の人々へのアピールと共に、資金稼ぎとしてフォルクローレ（ラテンアメリカの民族音楽）のグループの人々にチャリティコンサートを依頼したりもしました。コンサート会場にはアトリエのメンバーの絵を飾り、そこで収益金六万円は私たちの活動資金とな

公民館のアトリエは広々としていて、アトリエとしての条件は揃っている。



真冬のフォトスケッチの様子。真っ白な雪景色のなかをメンバーそれぞれが写真にその風景を切り取る。

拠点となる施設がなかつた頃には、廃校となる小学校の空き教室を使って絵を描くことも試みています。そのときに、小学生たちと一緒に花の絵を寄せ書き風に描きました。これは、私たちにとって今でも大きな宝です。

また、行政関係者へのアピールとして市長へ手紙を書いたり、網走市役所のロビーを借りて作品展を開催しました。ロビーでの展示は、その後思わぬ方向へと発展しました。

一つめは、この展示を見た地元の花屋さんから店のシヤツターのペインティングを依頼されました。ペンキ代

りました。



フォトスケッチをした作品を見ながら、メンバーとさまざまなことを語り合う。

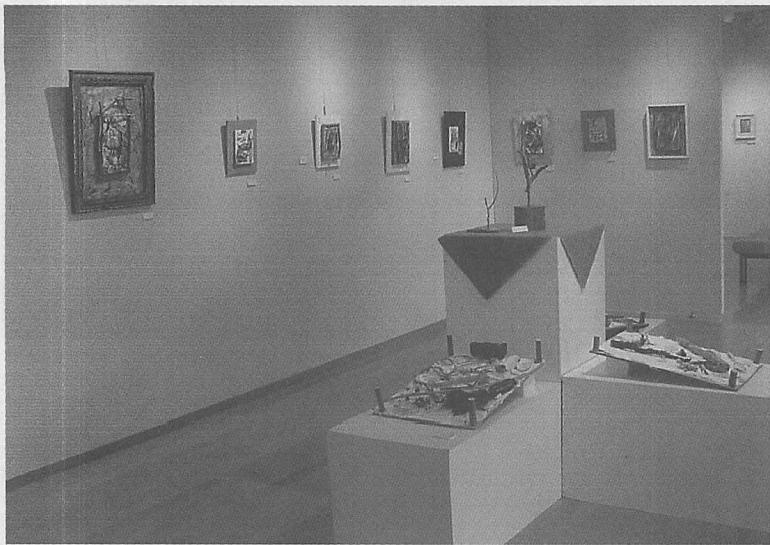


床一面にフォトスケッチを飾ってみると、四季折々の網走の風景が広がった。



味気ないシャッターが、色鮮やかなシヤツターへと生まれ変わる。なかなか根気のいる作業である。





「静かなる対話 アート・キューブ」展の入口風景。

は網走市に負担してもらい、鮮やかなシャッターが完成しました。

二つめは、アトリエの確保です。休眠状態にあつた公民館の二階の使用及び管理を任せられました。非常に大きい施設で、アート・キューブの他に漆塗りのサーケルが一部を使用しているにもかかわらず、広い空きスペースがあります。

このように、病院から独立したことでの地域の人々との交流も盛んになりました。病院のなかで行うデイケアでは体験できなかつたことばかりです。

分析ではなく、アートとしての活動

二〇〇三年三月現在、アート・キューブには障害のある人が七名在籍し、そのうちの五名が中心となつて活動しています。不定期ですが月一～二回の活動日には、午前中は話し合いやフリー活動に、午後は絵画に取り組んでいます。

精神障害者は心に障害のある方ですから、表現するところには辛くなることがあります。精神病院では医師や看護婦など他者からの、さまざまな視線を浴びます。「こんなことを描くと病気と思われはしないか」とメンバーたちは不安になることもしばしばです。そこで、アトリエでは、メンバーの表現は精神分析の手段ではなく、アート活動であることを強調して自由に表現するようにアドバイスをしています。

そうすることで、メンバーたちは伸び伸びと表現活動に取り組めるのです。好きな画集で見つけたルノワールの裸婦像を模倣してみたり、飲むことを禁止されているアルコールを題材に「うまい酒」と筆文字で書いてみたりと、抑圧していた自分を曝け出すような表現も試みています。精神障害者の絵には、素朴さやある程度の重たさを感じますが、そこが魅力であると私は思っています。

二〇〇二年十一月に、イギリスのトロンゲート・スタジオのメンバーの作品と一緒に展示した作品展を行いました。そのとき、来場者の多くの人たちが、アート・キューブの作品のほうが面白いと批評されました。トロンゲート・スタジオの作品は、同じ精神障害のある人たちの作品ですが、プロの芸術家たちによって技術的サポートを受けており、作品の完成

度も高いものです。この作品展を通じて障害者の作品に対する見方側が「変わったもの」「特別なもの」として見ている。あるいは、そういうものを期待して見ているのではないかという気がしました。障害者の作品が社会に多く紹介されるなかで、彼らの作品が健常者側から見えて「変わったもの」「特別なもの」としてイメージされ、位置付けられることに不安を感じます。しかし、現在では、仕方ないことなのかもしれません。障害のある人たちのアート活動の土壤ができていなかつたのですから。私たちの活動が北海道の障害者の新たな活動の道として、また、オホーツクの土壤づくりに一役担えるように



「静かなる対話 アート・キューブ」展では、トロンゲート・スタジオのメンバーの作品も展示された。

インディ。ベンデントワークミショップから 地域に根ざしたアートセンターへ

田野 智子

たの ともこ

(ハート・アート・おかやま事務局)



「実行委員会をつくる」活動

岡山では、二〇〇〇年一月に第一回めのトヨタ・エイブルアート・フォーラムを実施するにあたり、一九九九年三月に実行委員会を立ち上げました。このときの実行委員会は、私がこの十年絵画の指導という立場で関わっていたある施設を中心に構成していたため、仕事上の関わりという気持ちが強くありました。ともかく、フォー

ラムの参加者は百七十名と予想以上に多く、そのときの出席者のなかにいまの組織のスタッフもいます。

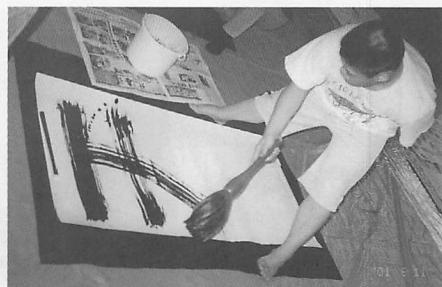
二年度めのフォーラムを二〇〇〇年十二月に実施するにあたり、会議を重ねた結果、私が事務局として動くことになりました。二年度めのアートサポーター入門講座では、仕事上の付き合いではなく真の意味で個人レベルの参加者が集い、二日間が大変充実したものになりました。アートサポーター入門講座は、造形活動に関わるこ

と、アートマネジメント講座、作品展示に至るまで参加

者一人ひとりに響くものでしたし、何を隠そうこれによつて一番変化したのは、実行委員会そのものであつたと感じております。私たちはこのとき参加者に実行委員募集を呼びかけ、事実上市民活動がスタートしました。

二年年度めのフォーラム終了後、呼びかけに応じた人々が二〇〇一年二月に集まりました。そして月一回のペースで、定例会を開くようにしました。そこでは実際に関わりたい人が集まつて、三年めとなる、トヨタ・エイブルアート・フォーラムの自主企画について何を行いたいかを話し合うことや、自由に相互の情報交換を行うようになつたのです。

実を言うと、私たちは、トヨタ・エイブルアート・フォーラム自主企画に対する助成の決定より先に、その年の十二月に約五百八十 m^2 の展覧会場の予約をしていました。私たちの活動を社会にアウトプットすることが、一番の願いであり夢でもあつたのです。ですから、トヨタ自動車からの助成が決定し、展覧会を開くことができたときは、安堵したものです。



越前和紙にアクリル絵の具で彩色し、その上に「風」をテーマに大筆で書く。ファシリテーターとなった書家は、ワークショップを通じて書の原点を見たという。



岡山大学教育学部の美術棟で行っている粘土のワークショップの様子。一人20kgの粘土と全身を使って格闘した。



子どもは棒などを使って20kgの粘土に立ち向かう。ワークショップではボランティアとして岡山大学の学生が活躍した。



岡山養護学校を会場に、若手美術家とのコラボレーションでワークショップを行った。ぶら下げたオブジェに彩色していくのが面白い。

トヨタ自動車以外で助成金を申請し、最初に決定したのは、赤い羽根共同募金会でした。ここからの助成金を得られたことで、自主企画によるワークショップを開催することができました。しかも、地元の社会福祉協議会、NPOセンター、地元マスコミの方々などが選考委員であつたため、この活動に対ししてその後も理解と協力を得ることができます。

さまざまなワークショップの展開

ハート・アート・おかやまでは、障害のあるなしに関わらず参加できるワークショップ、今までアートとは無縁であったような障害のある人にも多く参加してもらえるワークショップを企画しています。これまで、岡山市内の学校の施設を利用し、書、粘土、オブジェづくりなどのワークショップを開催しました。

特筆すべきは、最初のフォーラムの参加者でもある、難聴の染色家のワークショップです。要約筆記のノート



ファシリテーターを難聴の染色家が務めたワークショップの様子。要約筆記のノートテイクを介しながらの展開であった。

展覧会など社会にアウトプットしていく企画として、以下のものが挙げられます。

二〇〇一年は県下各地から約百点の作品を展示しました。二〇〇二年には、廃校となつた学校で「ワークショップから生まれたもの」と題して展示しました。ここで、この学校の今後を考える岡山市の文化政策との協働が生じるようになりました。また、ワークショップに他市の行政の方が参加したことで、二〇〇一年秋、二〇〇二年夏に出前ワークショップを岡山県西部の笠岡市で行いました。地域の障害のある人や高齢者からも参加があり、

テイクを介しながら展開してくださいました。ファシリテーター（ワークショップの進行役。指導者ではなく、参加者と同じ目線でものをつくる）自身が障害のある人たちが多くのこと学ぶことができました。逆に、私たちが多くのことを学ぶことができました。

いずれのワークショップも地域のコアである学校を使い、その学校や近隣の学生にボランティアを呼びかけ、その学校の先生たちにキーマンとして関わってもらっています。

ハート・アート・おかやま



お互いのネットワークづくりに生かすことができたワーキショットになつたと思つています。

さらに、二〇〇二年に初めての総会を開き、トヨタ・エイブルアート・フォーラム岡山実行委員会から「ハート・アート・おかやま」に改称し再スタートをきりました。これを機に、より地元に根付いていく活動を展開したいと考えています。

私たちは、一人でも多くの人に表現の楽しさや自由を味わつてもらい、そこから生まれる感動や美しいものに触れることで沸いてくる潤いを共有できればと考えています。そして、障害のある人ならではの作品に触れ、非言語の表現から伝えられるものについても共にその意味を考えていくことを仕組めるような、個展や作品展を今後行う予定です。そして、地域に住む誰もが自由に作品を制作できるようなアートセンターを、地域のアーティストとコミュニティのなかでつくつていけるように、活動を開いていきたいと考えています。

アートは自分自身を深め、自己実現の可能性をもつと



笠岡市で行った出前ワークショップの様子。笠岡市内の障害のある人や高齢者など、多くの参加者があり、ネットワークが広がった。

同時に、社会とのつながりをつけることもできます。ハート・アート・おかげまに関わっている学校の教職員、学生、福祉関係の職員、アーティスト、行政関係者など、今まで分けられた社会機構のなかで生きていた人々が、一個人としてアートに出会い、それぞれの機能が開放されていくことで、今までになかったものが生まれるかもしれません。

全国各地との情報ネットワークも生かしつつ、地元で愛される団体であることをめざしていきたいと考えています。



「エイブルアートフォーラム岡山 2001」のチラシ

アートの本質を 児童たちと一緒に楽しむ

井ノ口 和子

いのぐち かずこ

(子どもとアート研究会)



エイブル・アートとの関わり

私がエイブル・アート・ムーブメントを知るきっかけとなつたのは、京都のみずのきの作品との出会いです。その作品に出会つたときの衝撃は、非常に大きなものでした。感動という言葉だけではなかなか言い表せない何かが私の心のなかにすとんと落ちてきました。その何かが私の心をぎゅっと捕まえて離しませんでした。私は、

その思いをかかえて、一九九八年の一月にみずのきを訪れました。それから年に一、二回アトリエを訪れるようになりました。

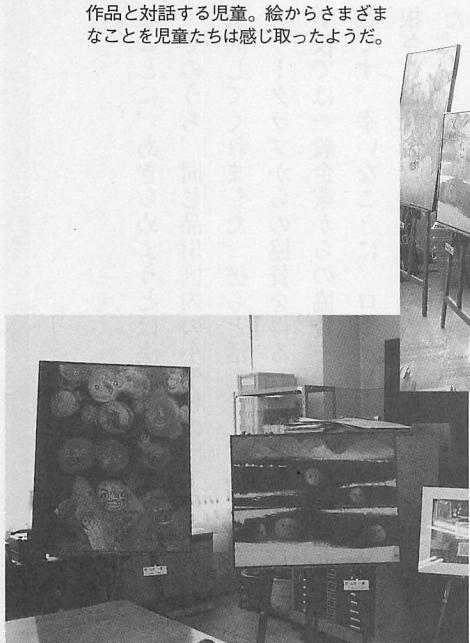
エイブル・アート・ムーブメントという言葉に出合つたのも、みずのきから紹介していただいた一九九九年の「このアートで元気になる」展の会場でした。展覧会の関連企画として、トヨタ・エイブルアート・フォーラム「新しいアートの胎動 エイブル・アートの可能性」に参加したときのことです。パネリストの一人が「学校で

の美術教育が創作意欲を抑圧している装置になつてゐるのではないか」という現場の美術教育に対する批判の言葉を述べていました。そのとき、私自身、現場の教員として非常に複雑な思いでした。確かにその通りの面があります。しかし、それだけではないという反発も同時に沸き起きました。学校が悪いとだけ言つても始まらないのではないかと。別のパネリストである美術館学芸員は、「制度・体制・組織」をキーワードに発言をしていました。そのキーワードを聞いたとき、「学校も一緒にあります」と非常に共感したのを覚えています。

そのフォーラムの中で、内側から打破していく、内側から変わっていく可能性をエイブル・アートは秘めているのではないかという話にも非常に共感しました。それ以来、いくつかのフォーラムやワークショップなどに参加はしましたが、一個人として仕事とは別として割り切っていました。そんな私がなぜ、「子どもとアート」を企画したのかを考えると、こんなエピソードがあります。

二〇〇〇年五月、とてもよいお天気の日に三階の図工室から階下へ降りるとき、私のなかにあるイメージが浮かんだのです。みずのきの絵が、階段、廊下、図工室にかかり、その作品の前に子どもたちが輪になつて座つて

作品と対話する児童。絵からさまざまことを児童たちは感じ取ったようだ。



図工室での展示の様子。廊下や教室を美術館に変えようという仕掛けを行った。

いるのです。作品を通してさまざまな話をし、楽しい時間を過ごすことができたらしいなと。一瞬、フランスのようになにかが浮かび上がりました。この学校に、児童たちの声があふれるいつもの学校に、みずのきの絵があったら、美術館になつたら素敵だなど。そして、「こんなよいことができないわけがない」と、無謀にも思い込んでしまったのです。

「MIZUNOKI EXHIBITION for めいちゃん」の開催まで

公立学校では展覧会開催のための予算を確保することはむずかしいことです。また、教員である私は、展覧会の企画を行つたことがありませんし、企画書の書き方すら知りませんでした。どのように協賛を得るのか、公立学校でそれが可能なのか。さまざまなか問題がありました。

二年間、多方面の人々に相談し、美術館に企画書らしきものを持ち込んだり、既存の研究会に提案をしたりしましたが、「一緒にやろう」とはなかなか言つてもらえない。時には、落ち込むこともありましたが、不思議

なことに、あきらめようとは決して思いませんでした。

そのうち、同じ品川区内の小学校の図工科教員たちが賛同してくれました。彼らと活動をしているうち、ロータリークラブからの協賛を得ることができました。公立学校では一般企業からの協賛を受けての活動は非常に困難です。幸いなことに、ロータリークラブという地域に根ざした社会貢献組織からの協賛を得ることができました。

私たちは「子どもとアート研究会」を立ち上げ、共通のコンセプトの確認や作品の扱い方についての話し合いを持ちました。そして、それぞれの四校で図工科の授業を開きました。一校に一週間、計一ヶ月間、みずのきの作品が品川区内の児童たちの前に登場したということです。

品川区立品川小学校での展開

私が勤務していた品川区立品川小学校をメイン会場とし、最終週に開催しました。展覧会というムードを高め

たいこともあり、チラシやDMを作成しました。みずのきから百号という大きめの作品を借りることができたので、廊下の壁に直接、展示しました。狭い廊下ですが、ガラスケースを用いず、児童たちがいつでも見える場所や方法を選びました。いつもは足の踏み場もない図工室などを美術館に変える仕掛けも試みました。廊下や教室など、実際に児童たちが動き回っている学校のなかで展示することは冒険であり、作品の安全面では少なからず問題もあります。

しかし、私のなかに「作品のすばらしさはきっと児童



六年生の授業では、自分が気に入った作品や心に残った作品をテーマとして、あるいは自分が描きたいと思うテーマを自由に描いた。



絵からそのまま感じ取ることができる児童たちの力は優れている。児童たちの意見や受け取り方が大きく分かれることもあった。

たちに伝わるはず」という思いがありました。大切に扱つてくれると確信していたのです。次に、どのように児童たちと作品を出合わせるかを考えました。そこで、「作品と対話してごらん。そして作品に話しかけてみて、あるいは耳をすましてみて」と、児童たちに投げかけました。「絵と対話するなんてできない」「どうやってお話しするの?」などと児童たちは言っていましたが、とにかく「作品の前に立つてごらん。そうすれば作品が何か返事をしてくれるのではないかな」と、児童たちに投げかけながら一緒に絵を見る時間を設けました。いつもやんちやな児童たちも、このときは本当に一生懸命に、作品を見入っていました。そして、みずのきの絵からさま

ざまなことを児童たちが感じ取ったようです。

本当は、地域一般の人々にも鑑賞に訪れてもらえる、開かれた学校での展覧を試みたかったのですが、学校を一般に公開するにはまだ機が熟していません。それでも、保護者だけには公開し、親子一緒に楽しんでもらいました。

児童たちの意見や読み取りが大きく二つに分かれたものに、山本一男さんの作品があります。一方では「とてもきれいな色を使っている。ユーモラスな表情ですごく楽しい感じ」という意見。これに対しても、「何か怖い、不気味だ、寂しい、苦しい」という意見です。「先生、どっちなの？ どっちが本当なの？」という一人の児童の声をきつかけに、他の児童たちが詰め寄ってきました。私は、「正解は分からない。ただ、山本さんの人柄、優しさ、楽しさが表現された部分からは明るい作品、楽しい作品だと感じたのかもしれない。障害があることいろいろ辛い思いをされていた部分、そういうところの表現を感じ取った児童たちは〈辛い、苦しい、不気味だ〉という感情を持ったのではないかな」と児童たちに話し

ました。

このように、絵からそのまま感じ取ることができる児童たちの力は本当に優れています。これがアートの持つ力だと私は強く感じました。

また、アトリエを担当されているスタッフの谷村さんをお招きし、六年生の授業を開催しました。「自分が描いてみたいと思ったテーマを自由に描いてみよう」という設定です。アクリル絵の具、クレパス、木炭、キャンバス、パネル、画用紙など、多様な画材を用意しました。思い思いのテーマでいろいろな画材を使用し、一気に描くという児童たちの姿を見て、この展覧会が意味のあるものであったと確信しました。児童に何が起きたのか、劇的な変化が起こったわけではありませんが、その意味を今後検証していきたいと思います。

今後のエイブル・アート・ムーブメント

第一に教員や企業、地域などさまざまな分野の人たちを巻き込んでほしいと思います。エイブル・アートの関

係者は福祉関係者が多く、学校関係者が少ないのではないかといふべきであります。学校関係者といつても、養護学校の関係者がほとんどであります。しかし、社会の多くの人々は、地元の学校へ通い成人します。社会を変えていくには児童を、学校を変えていくことが一番の近道ではないでしょうか。

第二に、ハウツーものを教える場にはなつてほしくないということです。

私が、この企画を実行するにあたって、二年間、苦労を重ねてきましたが、二年という時間は、私にもこの企

画にとっても、大事であったのではないかと思います。ハウツーを教えるだけでなく、刺激を受ける場、情報を得る場、仲間を募る場のきっかけになつてほしいと思います。最後に何故、児童たちにみずのきの作品を見せたかつたかといふと、「障害者のアートであつたから」ではありません。アートとしての質の高さを児童と一緒に味わいたいと感じたからです。アートとしての高まりや深まりの部分と、それらを誰もが楽しめる広がりの部分、深まりと広がりの両方をエイブル・アート・ムーブメントにおいて考え、探つていきたいと思います。



吉川さんの絵からは「さびしそうな猫の家族に見える」「笑ってよ。一緒に遊ぼうよ」という声が児童たちから聞こえてきた。



アトリエの担当者である谷村さんを招き、授業を開催した。



人が生き生き生活していくヒントを アートを通して伝えたい

高橋 夏樹

たかはしなつき

(アーツステーションどんこやスタッフ)



どんこやの設立と活動内容

宮崎県にある「アーツステーションどんこや」（以下、どんこやと略）は、身体に障害のある人たち六名が芸術活動をしている小規模作業所です。どんこやという名前は、「ゆっくりのんびりいいものを作っていく」と、どんこやに通うアーティストの一人が各駅停車の鈍行列車にちなんで付けました。

活動内容は、「まちづくり」「市民講座」「創作活動」の三つのテーマがあります。障害のある人の自己表現としての創作活動は、単なるモノづくりだけに留まらず、モノづくりを通して広がるネットワークを生かすことが大切です。そこで、作業所内だけでなく、ワークショップや講演会などを開催し、地域に開かれた活動を心掛けています。その一つとして、「どんこや芸術大学」という架空の大学を開校しました。建物はありませんが、宮崎市内のさまざまな場所でワークショップや講演会を開



2001年の平田オリザさんの演劇ワークショップの様子。中央が平田さん。



平田さんのワークショップは、障害のあるなしを意識させないものとなった。

催しています。内容は、まちづくり、観光、ヘルスケアなど多方面の分野に及んでいます。

また、他の作業所と少し異なる点は、障害のある人と職員が対等な立場で運営を行っていることです。どんこやのできたきっかけとして、障害のある人は、働きたくても地域のなかで、なかなか働く場所を得ることができないことがありました。また、メンバーとなつた障害のある人たちも、自分たちのできることで自立したいと思っていたのです。そこで、個別に創作活動を行つてきました五人が集い、マネジメント、創作スペースの確保、商品開発や販売などを展開することにしました。一人では解決しがたい問題を仲間が集うことで解決しようと、宮崎障害者芸術村どんこやという任意団体を設立しました。

これは、あくまでも同じ志をもつたもの同士のグループでした。しかし、障害のある人たちだけでは限界がありますから、一九九八年、正式に職員を雇い、作業所の申請をすることにしました。作業所の形態になると、宮崎市から運営費補助として定期的な収入、つまり、活動資金の補助が得られるのです。資金面では、非常に心強いサポートです。どんこやは、名前の由来のようになかなか前に進まないところです。しかし、のんびり型のどんこやがこれから挑戦していくことは、自分たちの



車椅子を使う障害のある人もワークショップに参加する。写真は平田オリザさんの演劇ワークショップ。



どんこやの演劇ワークショップでは小道具をつくることから始まる。

アートを通して人が当たり前に生きいき生活していく上でのヒントを伝えていくことです。また、障害のある人だけでなく、子どもやお年寄りなど誰もが気軽にモノづくりに参加できるアートスペースをつくることです。そのために、芸術がどんな力をもっているのかを私たちの活動を通して見つめています。障害のある人たちが、まちのなかに積極的に出ていくことは、まち全体が自立的に生きていくステージになります。

ある意味、障害はもって生まれたその人の個性と言え



平田さんの率いる青年団の演劇公演では、プロデュースを引き受けた。写真は公演の受付の様子。

ます。そういう個性を發揮できる場をまちのなかにつくることをめざしています。

トヨタ・エイブルアート・フォーラムとの関わり

どんこやを作業所として設立させた一九九八年、トヨタ・エイブルアート・フォーラムを初めて開催しました。二年めの企画で展開する一九九九年には、アートサポーター入門講座を開きました。三年目の自主企画では、



どんこや芸術大学は宮崎市のさまざまな場所で開校される。写真は宮崎市内に設置されたどんこや芸術大学の講座で染めたフラッグ。



どんこや芸術大学の学生が染めたフラッグは数種類ある。写真は市内の商店街に飾られたフラッグ。

それまでのエイブル・アートの世界にはなかなか登場していない演劇に挑戦しました。演劇はどんこやのメンバーの一人が好きであったからです。そこで、劇作家の平田オリザさんに相談し、障害のある



フラッグアートは宮崎市内の6ヶ所で展開した。写真は宮崎市役所の噴水近くに飾られたにフラッグ。

るなしに関わらず、さまざまな人を対象にした演劇ワークショップを開催しました。私たちが平田さんにお願いしたことは、「障害」を意識せず、普段行っているワーキショップを開いてほしいということだけです。しか

し、平田さん自身、障害のある人とワークショッピングをするのは初めてのため、どのような内容にするのか、ワークショッピング開催直前まで迷われたそうです。

ワークショッピングに参加した六十歳の女性は「六十年間生きてきて、台詞というものを初めて言うことができ、とても気持ちがよかつた」という感想を述べてくれました。メンバーたちも障害のあるなしをまったく意識させない演劇の可能性を確信したようです。

演劇ワークショッピングから公演プロデュースまで

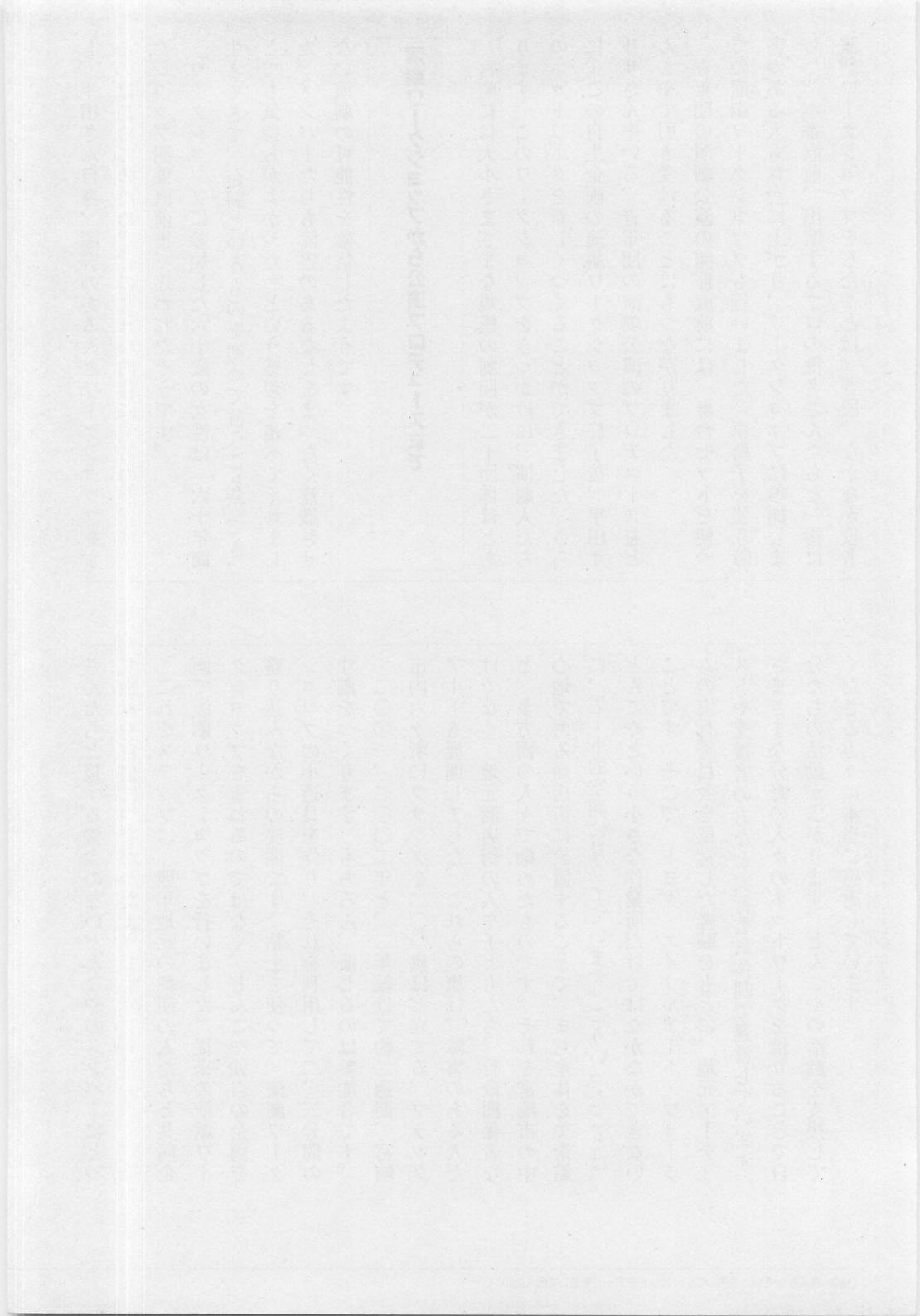
宮崎には大小さまざまな規模の劇団が二十団体ほどあります。このワークショッピングをきっかけに、演劇人たちのネットワークを新しくつくることができました。さらに、この自主企画の演劇ワークショッピング終了後、平田オリザさん率いる、青年団の演劇公演のプロデュースをどんこやで引き受けることにもつながりました。

青年団の演劇公演の開催直前には、舞台セットを使っての演劇ワークショッピングも行いました。車椅子を使う障害のある人も舞台に上がり、ワークショッピングに参加しました。本番直前、出演するプロの役者さんたちと一緒に演劇ワークショッピングをしたことは、普段、なかなか役者

さんたちと接する機会のないどんこやのメンバーにとって励みや自信につながったようです。

これをステップに、翌年地元の劇団の人たちと共同企画で演劇ワークショッピングを行いました。従来の演劇ワークショッピングをまねるのではなく、どんこや独自の企画を盛り込みながらの展開です。粘土を使って、演劇ワークショッピングの小道具を作り、それを利用して二、三分間の寸劇をつくります。もちろん、演じるのは参加者です。

二〇〇一、二〇〇二年と、二年続けて約二週間、宮崎市内六ヶ所にフラッグを二〇〇旗ほど立てる、フラッグアートも展開しました。これらの旗は、障害のある人だけでなく、地元商店街の人や子どもたち、行政関係者など、多方面の人々で染めたものです。それを宮崎市の中心地である商店街に設置することで、まち全体を美術館に、アート的空間に見立てています。こういったことは、どんこやという小さな作業所だけではなかなかできないことです。そこで、トヨタ・エイブルアート・フォーラムの実行委員会を運営した経験をもとに、地元アーティストや支援者の方など実行委員体制で運営しています。さまざまな分野の人々のネットワークを借りることで自分たちの活動が広がります。どんこやの活動を支援してくださる方々に本当に感謝しています。



エイブル・アート・ムーブメントを考える

エイブル・アート・ムーブメントの意味やめざすべき方向性について、アート、社会学、行政、文化政策の視点から考察します。そこからこのムーブメントの本来の目的や役割を再確認し、新しい時代の社会とアートの関係について考えます。

アートの視点から
【参加するアート】

長田謙一（千葉大学教授・芸術学）

社会学の視点から
【市民社会とアート】

栗原彬（明治大学教授・政治社会学）

行政の視点から
【文化行政とエイブル・アート】

上西利一郎（宮崎市教育委員会 文化振興課主査）

文化政策の視点から
【地域文化の創造】

西尾真治（JFJ総合研究所 芸術・文化政策センター研究員）

講演

アートの
視点から

参加するアート

「エイブル・アート」のなかから



長田謙一

ながた けんいち

(千葉大学教授・芸術学)



エイブル・アートが照らし出すもの

エイブル・アートは大きく二つのものを照らし出しています。一つは、障害者のアートという狭い見方でとらえたもの。もう一つは、障害者のアートを通して既存のアートや社会そのもののを見直す芸術運動、という広い見方でとらえたものです。

この概念は、従来ともすると曖昧さも指摘されることがありました。直接エイブル・アートに関わっているわけではない立場にとつて、この運動がより明解に理解されうる方向に向けて、この概念を整理しながら考えてみたいと思います。私は、はじめに障害者アートという狭い見方でとらえ、理解を深めていくうちに、もう一つの広い見方へと道がつながっていくのではないかと考えました。

まず、狭い意味でのエイブル・アートを順を追つて考えてみましょう。

従来、さまざまな福祉施設で絵を描いたり、粘土を使っての造形をしたり、あるいはダンス

を行つたり、という活動はありました。しかし、それはあくまでも余暇という位置づけであり、

アート的な活動と認められたものではないと言われます。それに対しエイブル・アート運動は、それは単なる余暇活動ではなく、アートという意義を持つてゐる活動なのだ、という積極的な主張を行いました。仮に障害のある人たちは、アート活動を行う資格も権利もある。現に十分アート的な活動を展開している。障害のある人も健常者同様にアートに関わることができるのだ、と宣言したのです。

一方には、専門家アーティストによるメインストリーム・アートが位置し、もう一方に、アーティストではないという意味で普通の人によるアートが位置しています。二つが対比されるようなアートの構図のなかで、その後者に、障害のある人のアートも組み入れられて然るべきだという主張が、エイブル・アート運動から提起されたと、まず考へることができるでしょう。

エイブル・アートの位置づけ

当初からエイブル・アートには、もう一つ、一層積極的に、障害のある人たちのアート活動のなかに特別な表現の次元を認めてアピールしていく、という動きが宿されていました。それは、「普通の人」のアート活動の一環に、障害のある人の活動が位置づけられるということを越えて、「普通の人」のアート活動よりも障害のある人の活動のほうが、はるかにアピール力があり、魅力があり、また私たちが深く考えるに値する問題を提起する力に満ちているのだ、という考え方なのです。

ここで見えてくるのは、専門家ではない普通の人のアートの水準に障害のある人のアートが並ぶのではなく、むしろ障害者のアートは、社会的に認知確立された専門家によるアート（メインストリーム・アート）と同じ水準で、それに対するほどの意義や力を持つたものとして位置づけられるという構図です。

この水準に並ぶのは、障害者のアートだけで

はありません。例えばアヴァンギャルドがあげられます。アヴァンギャルドは、常にメインストリーム・アートと対抗しながら、それを組み替え、そしてそのことによって新しいメインストリームを形成していくものでした。とりわけ一九九〇年代以降、例えばジエンダーに深く関わったフェミニズムのアートや、ヨーロッパ中心的な芸術原理を打ち破つていこうとするエスニシティに深く関わったアートは、世界のメインストリーム・アートを組み替える形で顕在化していきました。障害者のアートは、そのような動向といわば同格に並んだということになります。

ここまでくると、すでにエイブル・アートに関する広い見方のほうに移行しています。はじめに述べたように、エイブル・アートは、狭い見方では障害者のアート、広い見方では障害者のアートを通して既存のアートや社会のシステムを照らし直し、組み替えていく芸術運動です。ここで狭い見方である障害者のアートに注目しながら考えを進めたことで、障害者のアートは、実は既存のアート、あるいは既存の文化システムを捨て持つほど、それは今までのアートが組

ムを問い合わせる、という広い見方での意味を持つたものとして、理解されるに至ったのです。

文化の仕組みを問い合わせる

そこで次に、エイブル・アートを、障害のある人のアートを通して、既存の社会、文化、芸術の問い合わせを行う、というように規定して考えを進めてみましょう。

まず最初には、アートの文脈でこの問題を考えることです。専門家によるメインストリーム・アートを、障害者のアートを突出点としたエイブル・アートが問い合わせし、照らし直し、組み替えていくとき、あくまでもそれはアートという文脈のなかで考えられているわけです。アートの文脈のなかで考えると、それに伴つてどういうことが生じるのでしょうか。

実は、このアートの問い合わせを行うことは、繰り返しアートの文脈のなかに回収され組み込まれていく、ということを伴つてきます。今までのアートの問い合わせが、社会的にアピール力を持ってば持つほど、それは今までのアートが組

み替えられて新たに再確立されたアートのなかに包摶される、という結果を招きます。

例えば、アヴァンギャルドは従来のアカデミックなアートを批判し、時には反芸術というスローガンを掲げて展開されました。しかし、十年二十年三十年経つうちに、美術館のなかでもっとも重要なアート作品として、そのアヴァンギャルドの作品が迎え入れられています。こういった例を私たちは数多く見てきています。つまり、アートの文脈のなかで既存のアートのあり方やシステムを問い合わせ直しても、その結果は再び更新されたアートのなかに回収されていくのです。この文脈のなかでは、この仕組みから逃れることはできません。

既存のアートを打ち破る

の
ら

トか

一
点

ア
視

講演

のアートとは違うものを考えていきたい、つくり出していきたい、という動きがさまざまな形で展開されています。エイブル・アートはこの、位置づけ直して考えることができるのではないのか、と思うのです。

近代のつくり出したアートの枠組みを越えようとする動きは、実際には一九八〇年代に初めて始まつたわけではありません。古典的アヴァンギャルドそのものが、既にそのような兆しを内に含んでいました。なかでも、ダダイズムや「野生の眼」^{※3}（アンドレ・ブルトン）を唱えたシユールリアリズムは、芸術と日常生活の垣根を打ち破つていくさまざまな試みや、目覚めた意識の制度的なあり方を打ち破つていくという、無意識の持つ力を展開していました。ただそれも前述のように、二十年もたてば、強固なアートという文脈のなかに回収されてしまったのです。あくまでもアートの外にいる、というスタンスを堅持しようとすること、「アフター・ジ・アート（芸術のそのあとに）」というスタンスを

次に考えられるのは、アートの終わりの文脈のなかでのエイブル・アートの関わりです。すでに一九八〇年代以降、メインストリーム・アートのなかで、「美術は終わつた」「アートレス」「アート以後」などと語られています。今まで

堅持すること、今はそれが問われていることに

なります。

例えば、アンドレ・ブルトン（一八九六～一九六六）は、近代文明人の既存の文化や社会システム、常識や価値観、政治的権力に刺し貫かれた目ではなく、まっさらな「野生の眼」で近代的なアートではないものを見ようとしました。ブルトンからすれば、常識的な美術が理解できている普通の人間は、はるかに非芸術的だ、ということになるわけです。

「健常者」の、「普通」の、芸術的な非芸術性を打ち破るものとして、障害者のアートは芸術の外にあって、芸術がかえって非芸術的であることを暴き、アートの文脈そのものを打ち破つていくものとして位置づけることになります。そもそも、繰り返しアートに回収されてなお、不斷にその外側に位置し、意味を生み出し続けようとする姿勢においてアヴァンギャルドの眞髄が認められるべきだとすると、この意味でのアヴァンギャルドは、今論じている障害者アートの位置に通じるということになります。

まったく違う角度でさらに例をあげれば、一

九三七年にナチスが「退廃芸術展」として、表現主義を中心とするアヴァンギャルドをさらし者にしたとき、ナチスはそれらの作品が「精神障害者」とこんなに似ている、というセンセーショナルなイデオロギー的論陣を張りました。つまり障害者のあり方とアヴァンギャルドのあり方を、一つにつないで見せたのです。これはナチスによるまったく不当な行為でしたが、裏返して見たときに、実はそこに一片の真理があるのです。ナチスが実は一番恐れていたのは、既存の文化のなかに含まれている一つの権力的なシステムを根底から問い合わせ、という原理だったのです。それは、アヴァンギャルドと、既存の意識の秩序に拘束されない障害のある人々の存在にあつたわけです。アイロニカルに考えてみれば、だからこそナチスはアヴァンギャルドと障害のある人を共にさらし者にしようとした、と言えるのではないでしょうか。

参加型アートと表現

以上、一連の議論の最後に、一九八〇年代以

降、メインストリームのなかに生じた新しい可能性に注目しておきたいと思います。メインストリームとそうでない人々は、どこまで行つても交差することのない世界のように思われていました。一九八〇年代以降、前述の意味でアヴァンギャルド的な姿勢に立つアート動向は、野生の眼、素人の眼、子どもの眼、あるいは精神障害者の眼に特別な意味を与えました。それは、メインストリームとそうでないものが相交わる可能性の兆しだったのです。

この二つの領域の交差する可能性に注目して、さらに一九九〇年代以降、顕著に展開され始めているのが、いわゆる参加型のアートではないかと思います。例えば川俣正さんや藤浩志さんといった、日本でメインストリームのなかに位置するアーティストたちが、非専門家の普通の人と一緒にになってアート展開をしています。

参加型アートというのは、メインストリーム・アートと普通の人の表現が交差している現代の状況を、もつとも象徴的に示しているアート展開ではないかと思われます。

いつたい自分は何であり得るか？ 私たちは

講演

のら
トか
一点
ア視

生きている間は、九九・九九パーセントぐらい社会的な基準や約束や思惑などを自分の内に習慣等として肉体化しながら、社会的な約束等々に反しないように生活しています。でも、それが本当の自分であるか問うならば、（実際には）問うこと自体をやめて生きていますが、実は九九・九九パーセントの人がそうではないと思うでしょう。もし、それが本当の自分ではないとしたら、本当の自分は何であるのか。それはもう一回苦労して、一人ひとりが本当の自分をつくり出さなければ、できてこないので。

表現するというのは、実は自分のなかにまだない、しかしこれから生まれ得る、その可能な自分というものをつくり出すということなのです。そしてその表現は、人の前に自分の言葉を発すること、自分の絵筆の痕跡を残すこと、自分の身体の動きを提示することであるのです。しかし、それが成立するためには、自分が自分の可能なあり方を求めて、人の前に自分が受けとめてくれるという信頼関係が、表現には不可欠の前提になります。

つまり表現というのは、自分が自分をつくり出し、自分がまわりの人と信頼しあう関係をつくり出し、自分が世界を受け入れ、世界が自分を受け入れるという関係をつくり出す行為だと言えるのではないでしようか。

参加型アーティストは、アーティストでない普通の人々のこの表現をアートとして開く可能性をはらんでいるのです。メインストリームの中のこの動向は、コミュニケーション・アートと呼ばれる「普通」の人々のもとでのもう一つのアート動向とリンクして、新しい状況を生み出しつつあります。

エイブル・アートが示すもの

まわりにいる人たちがこよなく愛し、また〈この人〉を受け入れるということによって、この人もまた受け入れる人も自分を見つけ出し、勇気づけられて生きていく、ということです。アートというのは専門教育を受けた専門家だけのものであるという枠組みが壊れ、無限のグレードのなかで、改めて専門アーティストと非専門の普通の人の表現がさまざまにつながりあつていく、というところに我々は差しかかっているのではないかと思われるのです。

さて、エイブル・アートという運動が提起してきたアートの新しいあり方を、幾段階かにわたりつてたどってきたことで、最後に参加型アートを介して、メインストリームと一般・普通の人々の表現の連絡の可能性の地点にまで至りました。エイブル・アートは、この参加・コミュニケーション・アートのひらくつながりのなかで、既存の芸術・文化の仕組みに回収されない諸個人の表現をひらく可能性を照らす理念たるうとしているように思われるのです。

今、参加型のアートは、現代的なメインストリーム・アートをも普通の人によるアートをも交差させながら、焦点的位置にあります。ここで問われているのは、表現の可能性にさまざまなレベルがあつたとしても、また普遍性は直ちに獲得できないとしても、パリアを越え、〈この人〉のかけがえのない表現を、〈この人〉の

※1 アヴァンギャルド

語源は軍隊用語で前衛部隊、先頭船隊を指す。前衛的、革新的という意味で使われる。

※2 ダダイズム

第一次世界大戦中にスイスでおこった芸術運動。伝統や権威を否定し、破壊するというもので、美術のほか文学や演劇の世界にも波及した。

※3 シュールリアリズム

超現実主義。ダダイズムによる否定と破壊のなかから生まれた新しい動きで、心の奥にある世界の解放や本能的な欲望を表現することを唱えた。代表的な作家は、ミロ、ダリ、マツクス・エルンストなど。

※4 アンドレ・ブルトン

詩人。一八九六年、フランス生まれ。一九二四年に『シュールリアリズム宣言』を出版し、シュールリアリズムを「口頭、記述、その他のあらゆる手段で思考の過程を表現しようとする心的オートマティズム（意識下の非合理的な領域）」と定義した。彼の『シュールリアリズムと絵画』（一九二八）は「眼は野生の状態で存在する」という有名な一節で始まる。

※5 退廃芸術展

一九三七年、ナチスによつてドイツ・ミュンヘンで開催された展覧会。抽象的な「見てわからない」作品が集められ、ここに展示されたクレー、ヤコブ・ディンスキー、ココ・シユカなどの作家が退廃的として追放された。

※6 参加型アート

訪れる人が、作品を鑑賞するだけでなく参加することができる、なかに入る、蓋を開けて覗く、音を出すなどがあげられる。

※7 川俣正（かわまた ただし）

美術家。一九五三年、北海道生まれ。廃材を使って建物を覆うなどのプロジェクト（作品）を内外で発表。町の歴史や生活をふまえながら、現地の人々の手を借りて大がかりな作品を制作している。

※8 藤浩志（ふじ ひろし）

美術家。一九六〇年、鹿児島県生まれ。カエルや犬などをモチーフにしたインスタレーション（空間展示）やワークショップなどを各地で開催。東京湾アクアライン海ほたるにも作品がある。

講演

ア 視 一 点 か ト の ら

講演

社会学点から

市民社会と アート

栗原 樅

くりはら あきら

(明治大学教授・政治社会学)



アートは世界を反転させる

岐阜県の養老公園に、ニューヨーク在住のアーティスト荒川修作がつくった、養老天命反転地というたいへんおもしろい空間があります。全体がかなり大きなすり鉢状で、大小の建物が点在しています。入口に近い建物に入ると、床が斜めになっていて立つていられません。奥にある建物の床も傾斜していて、コンクリートでできたつくりつけの椅子は、座るところが斜面になつていて立つていられません。ここには電話やベッドやテーブルなど日常的なものがありますが、それが不具合にすれています。最初にこのような悪戯苦闘があり「なんじやこれは?」と思つてまわつていくうちに、だんだんアットホームな感じに変わってきたのです。

反転地の外に出たとたん、体がよろめき目眩がしました。普通なら反転地にいたときに目眩がおこり、外に出たら「やれやれ日常の世界に戻れた」と安心するはずが、逆だったのです。それで気がついたのは、反転地の世界というの

は暴力的な感覚で私の感覚を乱す、ということです。自然に思える外の空間が、実は近代の生活のなかでシステムの欲望に即してつくられたものであり、私たちはそれに慣らされているのではないか、と。いろいろ装飾があるにしても、

基本のスケルトンは近代的な合理性に関係のある空間です。反転地から外に出たときに、そういうものが見えてしまったのです。

この感覚は、私が最初にエイブル・アートを見て、外に出たときとよく似ています。皆さんもエイブル・アートにいろいろな形で出合っていると思いますが、最初の出会いを思い起こしてみるとわかるのではないでしようか。私は單なる感情的な問題ではなく、非常に精神的に高揚した気持ちになりました。外に出たときに、目眩ではありますんが、日常生活を取り巻いている空間のあり方がとてもよく見えてくる、ということをエイブル・アートから感じ取ったのです。

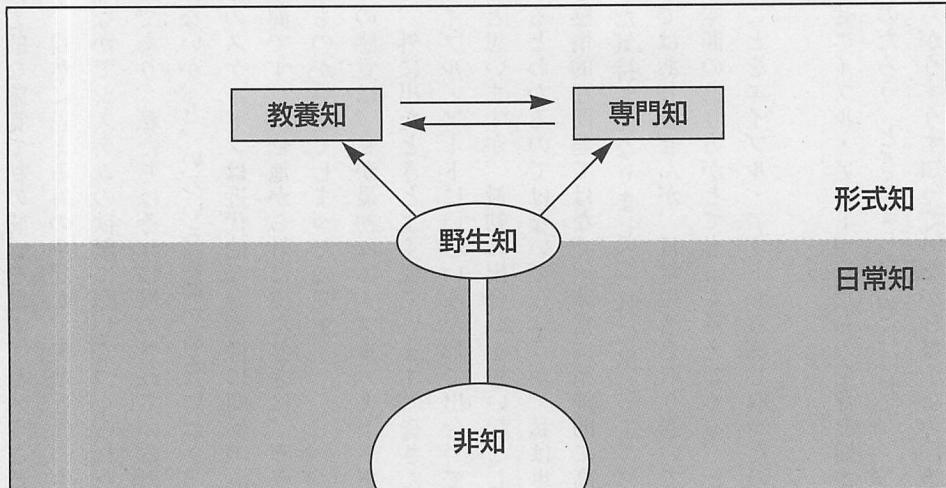
なぜエイブル・アートが私たちの全身を揺さぶるのだろう、と考えました。それはおそらく、私たちがうすうす知つていながらなかなか言語

化できない、ある知のあり方に関係しているのではないかと思います。

すべての人人が持つてゐる野生知

一方でエイブル・アートに接したとき、今までのアート觀が変わり、魂が揺さぶられます。とりわけ日常の世界に照らし合わせてみれば、その起爆力はすごいものがあります。他方で、エイブル・アートにはどこかなつかしいものを感じます。それは、たぶん私たちすべての人が持つてゐる世界で、自分のなかに出口を持たないで抑圧されているものなのではないでしょうか。

その点を考える上で参考にしてよいのは、知のあり方についての議論です。例えて言うなら大学の教養課程と専門課程のように「教養知」と「専門知」に分け、専門知の方が大事だ、あるいは教養知がなければ専門知も育たない、などと言われています。この二つは「形式知」のなかにありますが、教養知と専門知のやりとりだけでは、知の核心は生まれないと私は思います。



そこに「野生知」という領域を入れて考えるべきだと思います。本当に教養知が力を持ち、あるいは専門知が本当に人の心を揺り動かすような知であるときには、実は野生知が働いているのです。

野生知は、形式知に対する「日常知」のなかにあります。しかし、日常知のなかには常識といふくせ者があつて、しばしば一つの規範として、私たちを縛ります。常識知ではない、むしろそういうものを壊すようなものが、野生知にはあります。エイブル・アートが持っているのは野生知で、まさに直接そこに根ざしているアートです。だから、このように力を持つのだと思います。

この野生知というのは、レヴィ＝ストロース（一九〇八～）がパンセソヴァージュ（野生の思考）と表現したもので。それは、他者がいて、その他者の身になつて、その人のことを感じじうことができる能力、お互いにそういうことができる能力です。人と人が出会える場所が野生知なのです。

そこは出会いの場所であると同時に、文化コ

ードを壊す場所でもあります。野生知には切斷性という特徴があり、今までの規範的なものを持ち切ることができます。そしてそこは癒しの場所です。切斷性にも関係がありますが、いろいろな強制、規範から自由になる、解放されている場所です。いくら教養知のなかに癒しを求めようとしても、あり得ないでしょう。もし、教養知に心を動かす働きがあるとすれば、それは教養知のなかに強く働いている野生知なのです。さらに、魂とか命とか、言語化し難い、しかし非常にリアリティを持つた「非知」が、ある種の直接性で野生知につながれているのだと思います。

エイブル・アートの「魂の対話」という命名は、まさにピッタリの側面を持っています。表現の意図がなくて表現されるアート、ということが言えるわけです。そこにいる人たちがそれぞの生を力一杯生きる、精一杯生きる、ギリギリ生きる、というところからアートが出てくるのだとして、存在そのものがアートである、見えないアートがある、と考えてよいのだと思います。

私たちがエイブル・アートのなかになつかしいものを見るとすれば、私たちのなかに、それを感受する野生知の部分があるということでしょう。

ホーム(共生の家)がある場所

見えないアートがある、と前述しましたが、形をとつて作品が出てくるのは、すばらしいことだと思います。そのためには、そこにさまざまな方が関わりを持っています。絵を描く仲間がいて、一緒に描いていることでお互いに解放されていきます。それから絵の具やアートリエを用意してくれる人々がいます。非常に大事なのは、絵を描く人の内面に立ち入らず、見守ることで絵を描く才能を引き出す指導者がいることだと思います。

さらに、絵の展示に関わる学芸員やボランティア、実際その場所に絵を見に来る市民などが集まってきて、お互いの交流があります。そこに、市民一般、その他大勢という形ではなく、一人ひとりが関わりを持っていく場所が生まれます。

るわけです。

このような場所を、イヴアン・イリイチ（一九二六～二〇〇二）という哲学者は「ホーム」と呼びました。家庭という意味のホームです。私は「共生の家」と意訳しています。イリイチは、もともとはカトリックのお坊さんでした。メキシコ市の近くのエルナヴァーカに国際文化資料センターを設置し、世界中のいろいろな知識人、若い人たちを集めて、主に先進産業社会の構造を分析しました。著書のなかで社会全体が学校化しようとしていることを指摘し、それをくい止めようとしたり、医療問題についても、病院が巨大化していくことによって人間の命を養う場所が市場の方に吸い取られている、と批判しました。

イリイチが、インドのガンジーの簡素な小屋に行つたとき、自分のなかに癒されるものを感じたといいます。自分が解放されるものを小屋から感じたのです。イリイチは、それを「ホーム」と呼びます。イリイチは基地問題を抱えた沖縄や、公害病患者のいる水俣にも行つています。人々がつながりを持ち、分断された世界に

さわやかな関係を築いていくところに、ホームを見出しています。

エイブル・アートのアトリエ、あるいはそれをつくつていこうという人々がいる場所には、まさにホームがあると言つてよいのだと思います。

非領有、非支配の生き方

時代を振り返つてみれば、一九六〇年代から七〇年代半ばまでは、高度経済成長の時代でした。一九六四年の東京オリンピックの年が、高度経済成長のピークですが、私たちの現在の生活のスタイルは、だいたいこの六〇年代に決まります。七〇年代半ばまでの高度経済成長の時代は、主に大量生産、大量消費の時代です。モノの量の豊かさの時代だと言つてよいと思します。

八〇年代に入ると、多品目少量生産、モノの質の豊かさの時代だといわれました。九〇年代は、情報ネットワークを基盤にしたリエンジニアリングの時代であつたといわれています。

道具と装置のスペクトル

ホーム

地球市場

鉛筆 絵の具 散歩道 空き学校
電話 自転車 ファーサード 地域医療
ナイフ 鍋 アトリエ

学校 病院 軍隊 原発
ジャンボ ジェット

地球市場化システム
多国籍企業
国際金融資本

パソコン 楽器 公園 有機農業
コーヒー・ショップ コンピュータ制御の
クラフト コモンズ 小型汎用機械

化学農業 遺伝子組替作物
シンクタンク 知的財産権

ゲノム計画
バイオテクノロジー
核兵器

講演

社会学の
視点から

二〇〇〇年代には、ビル・ゲイツが「ビジネスも戦争も反応速度が生死を分ける」と言つたように、そういうスピードが価値を生む速度の時代、グローバル化の時代だと言われています。これが時代の大きな潮流です。人間が情報の速度に振り回される、時間の奴隸になるのです。情報とマネーと権力の所有に、血眼になる時代です。

だからこそ、人間が本来持つてゐる生きる力、表現する力を伸び伸びと解き放つことが大切です。そして何よりも、他者との間で、私は他者を支配したり所有したりしない、逆に私も誰かに所有されたり支配されたりしない、という非領有、非支配の生き方が大事だと思います。

前述のイヴアン・イリイチは、図のようないくつかの道具と装置のスペクトル」を書きました。「道具と装置のスペクトル」というのは、光を分光器にかけて波長順に配列したもので、このなかで、左端の方では、「ホーム」になじむもの、つまり鉛筆、絵具、電話、自転車、ナイフ、という手で使える道具をあげています。公園、コーヒーショップ、空き学校などはホームに近いものです。

ホームの反対側にあるものは、今日では、地球市場と呼ぶとよいでしょう。多国籍企業や金融資本など、要するに世界市場を牛耳る巨大組織がホームの反対側にあるわけです。イリイチがあげた学校や医療は右寄りだったのですが、これが空き学校となると、ホームのある左側に寄つてくるわけです。これは二分法ではなくスペクトルですから、配列になっています。

ホームから地球市場に向かつて、矢印が左から右へ動いていく世界の大勢のなかでは、人間がホームをつぶされていくのが現実です。それをイリイチは逆に、右から左へ越境しようと呼びかけています。市場がいらないということではありません。市場のなかには、価格形成市場のほかに、例えば市庭（いちば）には、祝祭や共同性や助け合いなど、とても人間的なホームが含まれています。これは企業活動の大事な側面としてホームを含んで考えていくことになります。企業が変わるわけです。右から左への越境というのは、単純に二分法ではなく、段階的なものです。それに対して、政治が一つの境界設定をやっていくことが、大事な役目になります。

新しい価値で道をひらく

私たちが言えるのは、エイブル・アートの活動を通して、障害のある市民と障害のない市民が助け合つてできることがあるのだ、ということがあります。そして企業も、このフォーラムのように、行動をおこすことが可能です。地方自治体にもできることはあり、国もまた、「障害者差別禁止法」などの法の制定をしたり、法を変えていくという非常に大事なことを進めてゆくことができます。そういうふたさまざまなレベルで相互に協力しながら右側から左側への越境を果たすには、いろいろな次元のいたるところにホームをつくり、ホームのネットワークを広げていく必要があるでしょう。

どの美術館も、市場化と不況の波のなかで危機を迎えていました。展覧会予算は削減され、空き教室ならざる空き展示室が増えています。しかし、美術館と展覧会を行政や市場主導のもの

から市民社会の「ホーム」に組み替えていく、そのことによってアートを市民化し、市民をアート化するという視座からすれば、この危機はむしろ好機に転じることができるのではないでしようか。いつまでも後期印象派やアート市場で高値のついたアーティストばかりを追いかけている時代ではないでしよう。

障害と非障害とを問わず市民が創造する、市

民が展覧会をつくる、市民が美術館や劇場の企画・運営・教育に協力するといった方向性が重要になりつつある、と言えます。すでに、佐倉市立美術館の市民グループIFS（イフス）のワークショップ、平塚市美術館の市民参加による企画展、埼玉県富士見市の市民文化会館のホール「キラリ☆ふじみ」のボランティアに対する劇場専用通貨「アーツ」の発行、「二十四時間三百六十五日」いつでも市民が使える金沢市民芸術村、同じく仙台市民の創造支援施設で知的障害者の通所施設「のぞみ苑」と同居している10—BOXなど、アートの「ホーム」構築の意欲的な試みが行われています。

このような方向性が見えるなかで、エイブル

ル・アートの位置も、かなりくつきりと見えるのではないかでしょうか。エイブル・アートにとって、新しい価値が生まれるのであります。新しい価値とは、生命、創造、協同に関わる価値であって、経済本位に編成されている社会の側から、共同性が豊かに実るような、多元的な市民社会のホームの側に、私たちが力を合わせて動いていくことだと思います。

※1 レヴィ＝ストローゲ （著）

フランスの文化人類学者。親族や神話の分析により、それらに「構造」があることを明らかにし、構造主義人類学を確立した。主な著書は『悲しき熱帯』『野生の思考』『親族の基本構造』『構造人類学』など。

※2 イヴァン・イリイチ

オーストリア・ウィーン生まれ。「コンビニアリティー（共生）」を唱え、多岐にわたる社会現象を取り上げて先進産業社会の構造を分析し、未踏の社会像への問いを提起した。主な著書は『脱学校の社会』『脱病院化社会』『シャドウ・ワーク』など。

講演

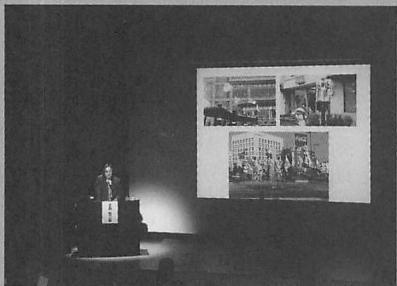
行政
視点から

文化行政と エイブル・アート

上西利二郎

かみにし とじろう

(宮崎市教育委員会 文化振興課主査)



「アートステーションどんこや」の誕生

宮崎には、長い間の自然共生から生まれたユタリズムの風土、県民性があります。この精神文化とエイブル・アートの精神との結びつきは、地域再生が求められるこれからの中社会において、密かにキーワードになつていくのではないかと思っています。

今回は、障害者芸術活動を通して、エイブル・アートに積極的に取り組む福祉作業所「アートステーションどんこや」と宮崎市との関わりを紹介します。

「アートステーションどんこや」につきましては、障害のある人の個人的な芸術活動において、マネージメントや創作スペースの確保、販売ルートの拡大など個人では難しい問題を仲間同士が集うことで解決していくこと、「一九九四年に前身の「宮崎障害者芸術村どんこや」が発足し、それが母体となり、一九九八年に作業所として誕生しました。

現在は、障害のある人六名が、スタッフと共に

に陶芸、絵画、クラフトなどの芸術活動を行っています。エイブル・アートをテーマに、地域住民との交流を通して、自立的に生きていく場、持つて生まれた個性を自由に發揮できる場となることをめざしています。

運営は、小さな組織体制にもかかわらず、チャレンジ精神のもと、地域に新しい文化の旋風を巻き起こし、その存在は、広く市民に知られています。現在、小規模法人による組織の運営の安定化および活動の発展をめざし、一口一円の債権を発行するなど、資金確保にも努力しています。

宮崎市の支援

次に「アートステーションどんこや」への支援を紹介します。

宮崎市の支援の一つは運営費の助成です。平成十一年度から、当時としては全国でもめずらしい、芸術活動を内容とする文化事業に対しての運営費の助成を行っています。平成十四年度は、年間約三百八十万円となっています。

第二には、仕事の発注です。宮崎市は平成十二年度に宮崎市福祉のまちづくり条例を制定し、この条例に基づいて定められたバリアフリーに関する整備基準が記載された冊子が製作されました。条例のなかで、バリアフリーなどの基準を定めており、この基準をクリアした事業所に市が「適合証」を交付しているのですが、この冊子と適合証のイラストを、「アートステーションどんこや」に依頼しています。特に適合証のイラストは、心温まるような雰囲気があり、市民の皆様に評判がいいと聞いています。

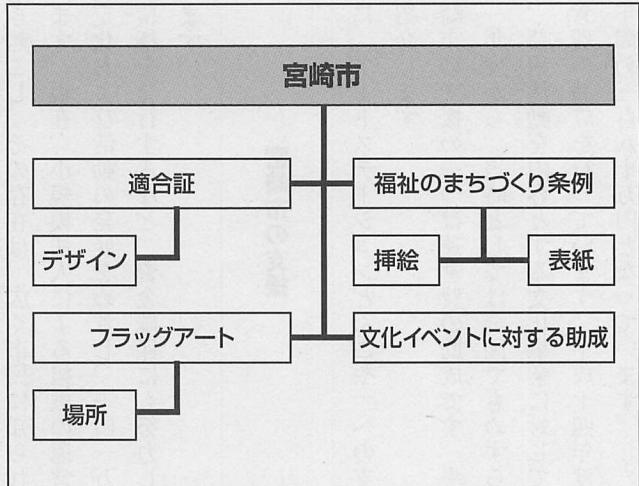
第三は、市民文化事業のイベントに対する助成です。地域文化活動補助事業として、平成十三年度に、エイブル・アートをテーマとしたワーキショップなどに助成しています。

また、高齢者等保健福祉推進事業として、平成十二年度から十四年度の三年間、助成しています。この事業の目的は、高齢者や障害者の方の保健福祉の増進ですが、ここにアートを組み込ませたということは、幅広い分野の横断的連携が求められるなかにおいて、有意義な企画だったのではないかと考えています。内容として

宮崎市が行っている「アートステーションどんこや」への支援



バリアフリーなどの基準をクリアした事業所に交付される適合証。イラストは「アートステーションどんこや」が制作。



は、「どんこや芸術大学」を発足させて、市民から学生を募り、演劇、自由に撮影する写真体験、紙書きなどのワークショップを年六回から八回開催しました。このユニークな企画は、地元新聞等で大きく報道されています。また、観光を目玉としている宮崎において、観光と芸術をテーマにしたフォーラムなども開催しています。

また、宮崎市には、「アートステーションどんこや」同様に、エイブル・アートに積極的に取り組んでいる「現代っ子ミュージアム」という民間のギャラリーがあります。このギャラリーに対しても、平成十二年度から十四年度の三年間にわたって高齢者等保健推進事業の適用を行い、アートの力、生きる力、障害と芸術などをテーマに、ワークショップや講演会開催の支援を行っています。

第四は、イベント会場の提供です。平成十三年度から十四年度にかけて、宮崎市では「フラッグアート」が開催されました。これは、障害のある人、高齢者、子どもたちが、各人の思いを自由に描いた個人フラッグや共同制作のフラ

ツグを、市内の公園、商店街や学校などに展示するイベントです。その会場として、宮崎市役所前の噴水広場を二週間にわたりて使用することを許可しています。

フラッグアートも、はじめはこれを見て「なんだらう?」と思つた市民も多いのではないかと思いますが、自由な意志が込められたフラッグは、次第に周囲の雰囲気にとけ込み、多彩な色のフラッグがバタバタと風になびく風景は、通りすがりの市民の心も和ませているのではないかでしようか。

以上が宮崎市のエイブル・アートに対する支援です。これらの支援は、市役所内でもさまざまな部署が、横断的に関わっています。支援を通して、役所のなかでエイブル・アートに対する理解が幅広く得られたことは、非常に有意義なことと思われます。

芸術に対する市民の認識が、格式の高いものから気軽に自由に表現することは楽しいものであり、自らの可能性に気づかせるものだというエイブル・アートの理念に視点が移つていくことは、重要なことであり、これは地域のまちづ

くりに大きく影響を与えていくことにつながるのではないかでしょうか。

エイブル・アート・ムーブメントは、今後、新しい時代の幕開けにつながつていく「地域文化創造」に貢献するファクターとして、全国的にさらに注目されていくものと期待しています。

地元の文化人を小中学校に派遣

「宮崎市ふるさと文化学習支援事業」は、エイブル・アートの理念に深く関係していると考えています。

宮崎市内には小中学校が五十三校あります。この事業は、地域で活動している芸術家をはじめとする文化人を「ふるさと先生」として、学校の授業に派遣するものです。特別枠の時間ではなく、通常の授業に派遣していることに意義があると考えています。目的は、「子どもたちが自由に表現する喜びを感じ、人との違い、個性を認識すること」にあります。

実施にあたつては、地元のNPO法人に委託し、学校とふるさと先生たちとの連絡調整、授

業の組み立てのサポートなどお願いをしています。

授業は、太鼓、尺八、合唱、絵画、短歌、詩、演劇、新聞づくり、まちづくりなど幅広い内容です。ふるさと先生と子どもたちが交流できるよう、四十名以内の一クラスを対象とし、二時間から四時間派遣します。

私は以前から、最近の学校の授業風景を見て、個の自律のもとに自由に表現しそれを認め合うような雰囲気がやや薄いと感じていました。個人として自由に表現し、自律して発言ができるような雰囲気がもう一步のような気がしていました。これは、学校の問題だけではなく、国際化の進む現代社会において、日本人の現在の精神文化の重要課題なのではないかと考えます。

この課題に視点を置いた事業が、「ふるさと文化学習支援事業」です。学校に民間の活力を導入したのです。最初は、十五名のふるさと先生にこの趣旨を説明するのに、十分に時間をかけました。「子どもが楽しんで自由に表現することを知つてもらひ、人と違つてもいいと感じてもらうこと」が目的で、技術指導は二次的なも

のです」と説明を繰り返した記憶があります。平成十三年度から実施し、二年目の今年は、二十三校に計百十五回、二百四十一時間、ふるさと先生を派遣しています。これは一方的な派遣ではなく、メニューを学校に送つて、学校で選択をしていただくというシステムです。派遣がゼロという先生も出てくる可能性があるので、学校側が選択することが、ここでは重要なではないかと思うのです。

このように、本格的に地域文化人を学校の授業に派遣していくという事業は、おそらく全国でも極めてめずらしいケースではないかと思います。

現場からも、たいへんな反響が寄せられています。「こんなに表現するのは楽しいんだ」「違うということはすばらしいんですね」という子どもたちの感想に加えて、「先生自身が子どもたちのこのような表情を見たことはなかつた」「表現することの重要性を学んだ」など、担当教諭も大きな刺激を受けている様子です。

ある授業では、日常生活を自由に写真を撮らせて展示していました。そこには「個性がある

だろう、違つていいんだよ、違つていることは大切ななんだ」と話す写真家を、食い入るようにみつめる子どもたちの姿がありました。また、短歌の授業では、一人ひとりの思いを自由に表現した歌に対して、心から「すばらしい、すばらしい」と賛辞する先生がいるのです。この先生の授業によつて、学校の保健室に引きこもつていた子どもが自信をもつて授業に出るようになつた、という話も寄せられています。この事業から、本当に多くの感動が生まれているのです。

これはまさに、エイブル・アートです。エイブル・アートの理念は、すべての授業の基盤になるものです。私は今後、芸術は教育の柱の一つに据えられるべきだと考えています。また、前述のような地域での活動と学校での活動は、将来的にリンクしていくことが期待されるところです。

変革が求められる行政施策

現在地方自治体は、情報公開の推進を背景に、行政と市民の協働のあり方の検討および実践が

講演

行 政 の ら
視 点 か

積極的に進められています。これまでの行政主導の伝統的手法、また既存組織で望む体制では、もう耐えられなくなつてきています。行政において、既存システムの崩壊と新しく価値体系を生み出す創造への認識の高まりのなか、文化のまちづくりの大きな柱となる芸術施策も、大きな転換期を迎えているのではないでしようか。

その求められるニーズの一つとして、市民がアートを身近に感じ、また市民自らも参画できる環境整備があげられます。敷居の高いアートから、自由に表現できる楽しいアート、自らの可能性に気づかせる身近なアートに重点が移りつつあると思われます。これは、年間三万人をこえる自殺者数、十三万人をこえる不登校児数、さらには過度の心的ストレスを抱えた国民の激増などが、誘因となつていて、どうしよう。

そして、市民とアートの結びつきを深めるエイブル・アート・ムーブメントを本格的な地域のまちづくりにリンクさせ、展開していく「プロデュース的存在」の誕生が待たれます。

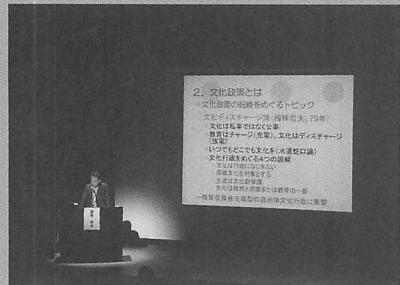
講演

文化政策の
視点から

地域文化の創造

西尾真治
にしお しんじ

(UFJ総合研究所 芸術・文化政策センター研究員)



文化政策の概念と流れ

エイブル・アート・ムーブメントを、文化政策の視点、特に地域文化という視点からみていきたいと思います。

はじめに、文化政策の概念を考えてみましょう。文化政策という言葉を分解すると、「政策」は社会の仕組みづくりのための計画・方策です。それに「文化」がついて「文化政策」となると、文化の視点から社会の仕組みをつくる、ということになります。では「文化」とは何か? 抽象的ですが、ゆたかさや幸せ、あるいは個の多様性の尊重などを追求していくことではないでしょうか。

日本で文化政策は、どのように認識されているのでしょうか。八八年に文化庁によって「我が国の文化と文化行政」^{*1}がまとめられました。そこに基本的な認識が、大きく三点ほどあがっています。まず、文化は人間にとつて根源的な欲求であること。二点めは、その活動自体の主体は国民自身であること。三点めに、国の果たす

日本における文化政策の流れ

時代	主な主体	文化政策の概要
戦前	国家	●國家の威信の誇示、国民国家のアイデンティティ形成のための文化の活用
戦後	国家→地域	●戦前への反省「文化に政治は介入せず」 ●文化財保護と芸術活動振興が軸
1960代～	地域(集権型)	●高度経済成長：経済成長への効果・産業的側面への意識 ●まちづくりの道具としての文化の活用 ●基盤整備、イベント、文化財保護が軸
1980代～	地域(分権型)	●「行政の文化化」地方分権、地域アイデンティティ ^(※3) 構築のための道具としての文化の活用 ●企業メセナの進展(官→民への分権)
1990代～	市民	●「文化の民主化」市民一人ひとりのための文化 ●「市民協働」住民民主主義の確立、NPOとのパートナーシップ

文化政策の移り変わり

役割は、主体である国民の足りない面を補うこと、とあります。日本の場合は、国が文化政策に主体的に関わっていくのではなく、あくまでも主体は国民なのです。国や行政は、その足りないところを支援していく、側面支援、奨励的支援という位置に置かれています。

戦前から現代までの、文化政策の歴史的な経緯を表にまとめましたので、参考してください。最近では、文化政策も大きく変わってきていると思います。主体は国から地域、地域から市民へと移っています。分野も、国として威信をかけたエクセルントアーツから市民一人ひとりの芸術というところへ、中心が移ってきてています。また、対象者についても、従来はプロとアマ、あるいはアーティストと鑑賞者というように分けられ、それぞれを対象とした支援がされていました。しかし、特に市民における芸術活動であることから、対象の分類があいまいになり、交じり合うという流れがあります。国による保

護と保存のための文化政策が、市民一人ひとりの創造のための文化政策に変わつてきているのです。

こうした文化政策のパラダイムシフト（価値観の移行）に関するトピックを、いくつか紹介します。

七九年に梅棹忠夫氏^{※4}が唱えた「文化ディスクヤージ論」は、文化政策の一つの大きな転機になりました。大阪府の文化振興研究会での提言がきっかけですが、教育と文化が混在している状況で、梅棹氏は、文化は表現や発表など発散する「ディスクチャージ」（放電）であり、教育は蓄積し学習してため込んでいく「チャージ」（充電）であり、文化と教育はまったく意味合の違うものであると主張しました。さらに、「いつでもどこでも文化を」という水道蛇口論や、「文化は私事ではなく公事である」として、従来の文化政策における考え方であった「文化は行政になじまない」「高級文化を対象とする」「主流は文化財保護」というものは誤解である、と主張し、文化政策に非常に大きなインパクトを与えるました。

八年には松下圭一氏と森啓氏が「行政の文

化化」を唱えました。行政の理念・行動のなかにも文化の考え方を取り入れていこうという主張で、職員自身、行政自身が自己改革を行なうことが、市民自治の目標の実現につながる、とうものです。

これからの地域の文化政策

地域における文化政策は、「政策」としての戦略性の重要度が高まっていくでしょう。これまで、国が唱えたことに追従する画一的なものでした。今後は、市民文化の活性化や地域の文化的固有性が重視され、地域の主体的な取り組みが求められるようになっていきます。

各地域が、地域に応じたゴールを明確化し、そのゴールに対して最も有効な手段を選択するということが重要になります。そのなかに、市民の参画と市民の精神生活の充足という文化的な視点を組み込むことが必要です。このように、市民文化をベースに地域の政策をとらえると、市民の活性化が地域自体の活性化につながることが想定でき、いわば社会の持つ潜在能力を向上させられるところに、文化政策の大きな意義

があると思われます。

エイブル・アート・ムーブメントとは

エイブル・アートには多面性があります。芸術・文化の分野であり、福祉の分野でもあります。創作・鑑賞活動としてはコミュニティ分野でもあります。しかし、このような分野に分け

てエイブル・アートをとらえようとすると、意味が限定的になり、本来の意義を満たさなくなってしまいます。これら総体としての意義、全体性がエイブル・アートの大きな特徴です。しかし総体であることが、逆にわかりにくさにもつながっており、ひいては、政策的な位置づけがあいまいになる、ということになるのだと思います。

エイブル・アートを狭義でいえば、障害のある人による芸術活動や芸術作品です。これらは、一般的には「障害者芸術」「障害者アート」とも呼ばれます。しかし、もつと概念を拡大して、障害のある人による芸術活動や芸術作品がもたらす社会的なインパクト、ととらえると、その姿がみえてきます。

講演

文化視点から
政策の

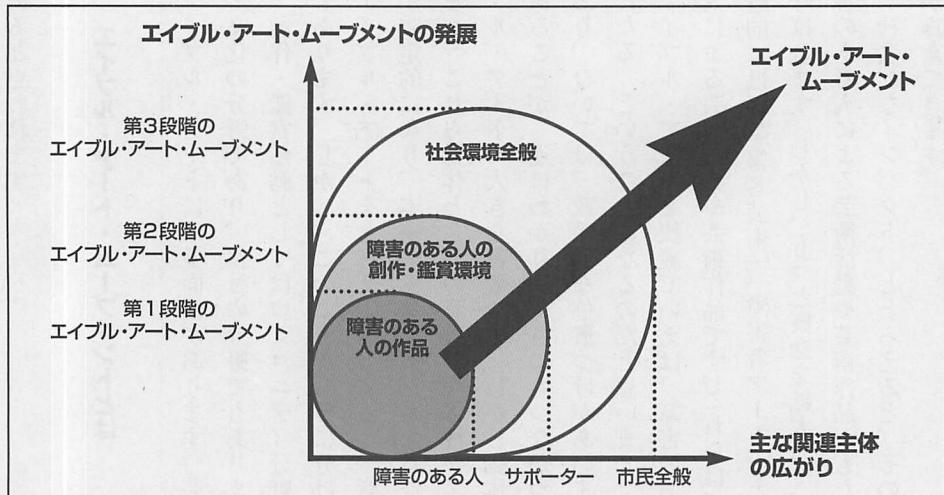
エイブル・アートのインパクトは、次の三つに整理することができます。一つは、新しい価値観の提示・アートの概念拡大です。これは主に芸術界・美術界におけるインパクトですが、今まででは特定の人だけに限られていた美術・芸術を、障害のある人も含め、美術界になじみにくい人にも拡大させたというものです。

二つめは、地域を巻き込んだ創作・鑑賞活動の誘発です。エイブル・アートには、多くのサボーラーが参加し、地域レベルの市民芸術活動を促進しやすい面があります。創作者と鑑賞者のみならず、サポーターまでが混然一体となつて、活発な市民芸術活動に結びついています。

三つめは、身近に芸術・文化に親しみつきかけの提案です。接しやすく、感じやすいアートであるというエイブル・アートの特徴が、芸術への「近づきがたさ」を取り払い、市民を芸術・文化に引き寄せるという効果を發揮しています。

エイブル・アート・ムーブメントの理念

こうしたエイブル・アートを軸とした新しい市民芸術活動がエイブル・アート・ムーブメン



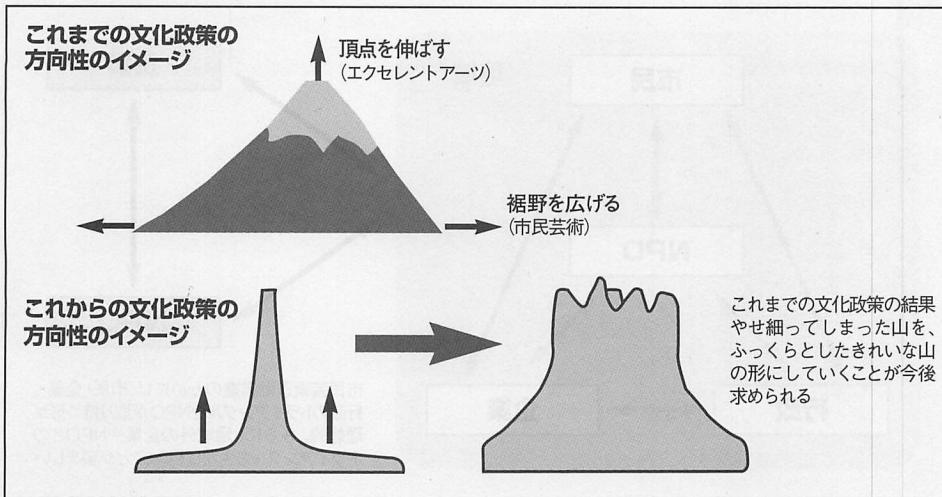
トです。これは、障害のある人が、生きいきと生きられる社会づくりをしていくとともに、人間やアートの可能性を見直していくものであります。最終的には、だれもがゆたかに生きられる社会をつくるという点に、大きな目標を置いていることが特徴だと思います。

エイブル・アート・ムーブメントは、図のような三つの発展段階でとらえられます。横軸に関連主体、縦軸に発展段階をとると、第一段階は、障害のある人の作品に焦点を当てた活動です。これは、障害のある人の芸術活動や作品の価値の再認識し、不当に価値を低められていたものを、元の価値に戻すということです。

主体がサポーターまで広がると第二段階で、障害のある人の創作・鑑賞環境が主なテーマになってしまいます。障害のある人が創作・鑑賞しやすい環境を整備し、地域レベルのサポート体制を確立するといった活動になります。

第三段階になると、主体が市民全般になり、社会環境全体に向けての動きになります。市民全般にわたる芸術活動の浸透、いわば芸術・文化のノーマライゼーションにつながっていきます。⁶

山にたとえた文化政策



文化政策の 視点から 講演

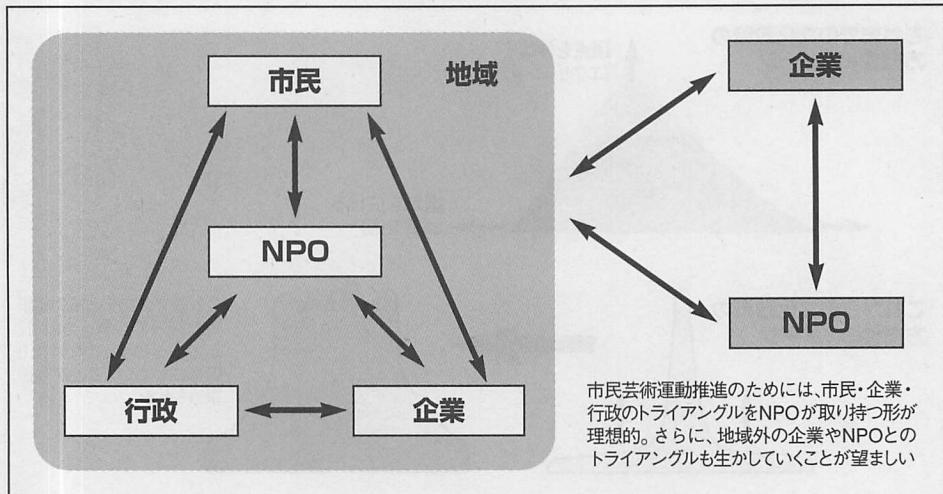
文化政策は山にたとえられます。山の頂点、つまりエクセレントアーツを伸ばすことと、山の裾野、つまり市民一人ひとりの芸術活動を広げることです。この結果は、私は図のような形だと思います。裾野は広がつておらず両脇が切れており、ふくらみのないやせ細った山になっています。これから文化政策に特に求められるのは、裾野を広げるとともにその活動の質を高め、ふくらとしたきれいな山の形にしていくことといえるでしょう。

このような文化政策を進める上で、社会的資源としてエイブル・アートをとらえたときに、は、次のような大きな可能性があるといえます。

一つは、エイブル・アートには広く市民に伝わりやすい根源性があるため、芸術文化に対する市民のアクセスをもたらしやすいという面があります。もう一つは、エイブル・アートは創

す。この左下から右上に向かってのベクトルが、エイブル・アート・ムーブメントなのです。

エイブル・アートによる地域文化の創造



作の場や鑑賞の場で人との関わりをもたらすことから、市民同士の交流を引き起こしやすいという面があります。また、創作者・鑑賞者・サポーターの立場が入り交じるという面もあります。つまり、まず広く市民を引き寄せ、次にその市民を市民同士の交流やさまざまな立場からの活動に巻き込むことにより、市民芸術活動の量と質を一気に高められる可能性があります。こうした社会資源としての高い可能性が形になつた例としては、ボランティアの拡大があげられます。たとえば九九年に東京都美術館で開催されたエイブル・アートの展覧会では、約一二〇〇人のボランティアが参加したといわれています。また、コミュニティ活動の拡大の一例としては、このトヨタ・エイブルアート・フォーラムのように、地域組織で推進されている例があげられるでしょう。

パートナーシップの理想形

このような市民芸術活動を推進するための各主体の関係については、図のように、市民・企業・行政が三角形になつて、その仲をNPOが

取り持つていくという形が理想です。地域のなかで、市民とNPOが実績を上げて力をつけていけば、行政は支援をしやすくなります。また、地域内の企業の参加にもつながり、地域のなかでのトライアングルができます。さらに、地域の外のNPOや企業とのトライアングルも生かしていくことが、パートナーシップの将来像として望ましい形だと思います。

エイブル・アート・ムーブメントの場合、今のこところ、エーブル・アート・ジャパンやトヨタなどが核となりながら、各地域で推進組織が育ちつつある状況といえると思います。この各地域のなかで、行政等ともパートナーシップを築きながら、いかにトライアングルを構築していくかが今後の課題といえるでしょう。

できる限り利用可能であるデザインを指します。

アメリカ・ノースカロライナ州立大学のロン・メイス氏の提唱から広がった概念ですが、これを実際の政策に取り入れる動きが広がりつつあります。つまりデザインといつても、製品や環境におけるデザインだけではなく、行政の施策全般にこういった考え方を導入していく、ということなのです。誰もが暮らしやすい市民社会づくりとして、日本では「しづおかユニバーサルデザイン行動計画」や「くまもとユニバーサルデザイン振興指針」などが導入されています。

文化のユニバーサルデザイン

今、「ユニバーサルデザイン」が注目されています。バリアフリーの概念は障害を取り扱うというものですが、これに対してもユニバーサルデザインは、はじめからさまざまな人にとって、

今後の展開に向けての提案

文化政策のから
講演

ユニバーサルデザイン政策と文化政策の関わりを考えてみましょう。小暮宣雄氏は、主にアーツアクセスの視点から、施設のバリアフリー化や企画のあり方にユニバーサルデザインを取り入れていくことを研究しています。施設のバリアフリーにとどまらず、より普遍的に「文化のユニバーサルデザイン」と考えると、これは

まさしくエイブル・アート・ムーブメントではないでしょうか。つまり、「はじめから誰にとつても活動しやすい文化的環境を実現する」といえば、文化のユニバーサルデザインとエイブル・アート・ムーブメントはピッタリと重なります。

ポジティブ・アクション（文化的触媒）

エイブル・アート・ムーブメントは、文化的な触媒としての機能も果たしていく可能性があるでしよう。

実は、文化ディスクヤージ論や行政の文化化が提唱されてから、二三十年以上経っています。市民文化という概念は整理されたものの、それを有効に機能させるための市民意識の成熟化という壁が乗り越えられない状況が続いているのです。こうした状況を一気に打ち破る可能性がエイブル・アートにはあると思われます。これを市民文化における「ポジティブ・アクション」の面から考えてみましょう。

ポジティブ・アクションは、男女共同参画社会等でよく使われる言葉で「積極的正措置」

という意味です。価値観を転換するためには、非常に大きな力が必要だということです。マイナスの要素をフラットに戻そうとするだけでは、なかなか価値観は変わらないということがあります。そこで、マイナスの要素をいつたんプラス側に逆転させ、価値観をひっくり返したもので、フラットな状態にならしていこうというものです。

このような形勢の逆転を生む力を、エイブル・アートは持っています。アートとしてみたときに、障害はマイナス要素とならないし、逆にハッとするような表現がたくさんあり、福祉的な見方を瞬時に逆転させる力があります。こうした関係性の逆転が、コミュニケーションバリアを取り払う可能性があります。つまり、文化におけるポジティブ・アクション、いわば文化的触媒として、市民文化の普及にかかる壁を取り払う効果が、エイブル・アートに期待できるわけです。

これからの方針性

エイブル・アート・ムーブメントは、文化政策と非常に相性がよい側面があるとみてきましたが、なぜそれが現実に結びついていないのでしょうか。その要因は、文化行政側とエイブル・アート・ムーブメント側のそれぞれにあると思われます。

文化行政側の要因としては、今のところ、政策的な理念が確立されていないことが問題です。理念がないから目標が明確に設定されない。そのために戦略的な発想ができず、手段の選択が限定されます。そういう状況では、エイブル・アート・ムーブメントのような総合的な発想には届きません。

一方、エイブル・アート・ムーブメント側の問題としては、政策的意義についての理論構築・発信が十分でなく、社会的なコンセンサスが形成されていないことがあります。今後は、理論構築とともに、行政に対しても積極的に働きかけることも必要になつてくるでしょう。

文化政策の視点から講演

これまでの行政の発想にないことについては、行政以外の主体が先駆者となつて実験的な取り組みを行い、行政が取り入れやすいように道を開いていくことが重要です。行政に対する働きかけと、行政を引き寄せていく活動が、今後求められていくのだと思います。

民主主義の起爆剤として

文化行政自体が、実は民主主義を進める上の起爆剤になるといわれている分野です。さらに、文化行政の起爆剤として、エイブル・アート・ムーブメントが位置づけられています。最終的な目標の民主主義に比べると、少し遠い存在になってしまうかもしれません。しかしこれを逆にとらえると、エイブル・アート・ムーブメントが起爆すれば、日本の民主主義を動かしていくことにつながっていく可能性を秘めているといえます。

行政における戦略的取り組み

政策の戦略性について述べましたが、一

方で、果たして行政において戦略的な取り組みということができるかどうか、というポイントがあります。戦略的取り組みとは、資源を選択・集中することです。しかし行政は、基本的に公共性の高いものについて、すべてをやらなければならない。そのなかで戦略的な取り組みが本当にできるのか、と考える必要があります。

ただし、行政需要は非常に多様化、拡大する一方で、財政はますます厳しくなってきていました。どうしても行政としてやることを限定せざるをえないという差し迫った事情もあります。

そこで、公共性を担保とする高度な戦略が必要になります。それは、特定分野に集中投資をするものの、その分野だけに成果を上げるのでなく、他の分野にも応用できるようにすることで、ひいては社会全体のレベルアップにつなげていく考え方です。そこまで展望してはじめて、行政における戦略的取り組みが正当性を得できるのだと思います。

総合的・複合的な政策

それでは、こうした戦略を踏まえたとき、どこに集中投資すべきなのでしょうか。他の分野への応用可能性という面では、さまざまな側面が関連しあう総合的・複合的な分野が望ましいといえます。いくつかの分野を組み合わせることによって、相乗的な効果・イノベーションを生み出す可能性もあります。

こうした総合的・複合的な分野は、まさにユニバーサルデザインであり、エイブル・アートでもあるのです。

また、総合的・複合的政策には、もう一つメソッドがあります。それは、一段高い目標設定ができるという点です。既存のユニバーサルデザイン計画をみると、その対象は文化、福祉、まちづくりなど分野横断的になります。その場合、計画の目標としては「ゆたかな社会づくり」といった個々の分野を超えた高い目標が掲げられます。地方公共団体における文化振興マスター・プラン等によくみられる間違いは、文化振興を目的としてしまうことです。あくまでも目的

¹³*

は「ゆたかな社会づくり」といったところにあって、その手段として文化に着目するのが文化政策だと思います。手段の目的化を避けるためにも、複合的・総合的政策でとらえていく意義があると思います。

ただし、この「ゆたかな社会づくり」については、ゆたかさ自体の再検討、あるいは共通認識を新たにしていく必要があります。今求めらるのは、市民自治につながっていくゆたかさではないでしょうか。経済的な側面だけを追求していくのではなく、市民レベルでの民主主義をめざしていくことが大切なのだと思います。

市民レベルの民主主義は、市民の側に課される責任も大きくなります。市民一人ひとりに相当高い文化的資質が求められるため、市民における文化的なプラットフォームの必要性、つまり文化政策の必要性が高いというところにつながつていくと思います。

【個】へのまなざし

民主主義は、単純な多数決という力の論理ではなく、少数の人たちもみんなが納得をしあえ

講演 文化政策の 視点から

るレベルまで相互調整していく仕組みです。多数をどうするかということよりも、むしろ少数をいかにあつかうか、という点が重要なのです。「個」へのまなざしが民主主義の確立には重要です。

少数にとつて切実であれば、多数がそれを尊重してガマンする選択もありうるので。つまり多数の利益の最大化が目標ではなく、納得の最大化をしていくことが重要であり、ひいてはそれが社会的効用の最大化につながるのです。

これはまさしく、ユニバーサルデザインの考え方といえます。つまり、ユニバーサルデザインがめざす「すべての人にとってよい」というものは、一人ひとりの立場の状況、価値観が異なる以上、原理的にあり得ません。実態としてのユニバーサルデザインの目標は、少数の人にとって望ましいことを、多数の人が理解して受け入れ、サポートしていくことの実現、それこそがユニバーサルデザインの将来像だといえるでしょう。

こうしたユニバーサルデザインの重要性を考えることにより、エイブル・アート・ムーブメントの重要性がより際立ってくるのではないで

※1 「我が国の文化と文化行政」

一九八八年に文化庁が我が国の文化行政に関する基本的な考え方についてまとめたもの。「文化的頂点の伸長」と「文化の裾野の拡大」を基本とし、文化基盤の整備、芸術活動の奨励・援助、文化への参加と享受の機会の拡充、文化財の保存と活用、文化の国際交流の推進を進めることとしている。

※2 エクセレントアーツ

「文化的頂点」であり、文化の精華である芸術を指す。その「伸長」により、文化一般を牽引し、国際的にも水準の維持・向上を図る必要があることから、政策主体は主に国として位置づけられている。一方、「文化の裾野の拡大」は、地域文化の振興と重なり、政策主体は主に地方公共団体と位置づけられる。

※5 松下圭一(まつした けいいち)、森啓(もり けい)

一九八一年に文化行政を体系的に論じた「文化行政－行政の自己革新－」を共著。個々の文化施策ではなく、行政のあり方全体を問いつて直し、「行政の自己革新」「行政の文化化」の必要性を説いた。文化行政の基本モデルを提唱したものとして、両氏の頭文字をとつてMKモデルとも呼ばれる。

※6 芸術・文化活動のノーマライゼーション

ノーマライゼーションとは、障害の有無に関わらず、すべての人のが地域社会において同等に生活し、活動できることをめざす考え方である。障害を持つ人に特殊な対応が必要であるとの考え方から転換したものであり、これを芸術活動に当てはめると、エイブル・アート・ムーブメントの考え方方に重なる。

※7 東京都美術館の展覧会

東京都美術館においては、エイブル・アートをテーマとした企画展が過去二回開催されている。一九九七年「魂の対話」展、一九九年「このアートで元気になる」展であり、いずれも大きな社会的反響を呼び、エイブル・アートの認識が広がる大きなきっかけとなつた。

※8 ロン・メイス

米国ノースカロライナ州立大学ユニバーサルデザインセンターの元所長。「ユニバーサルデザイン原則」を定め、製品や建物等だけでなく、環境やコミュニケーションなども含む幅広いユニバーサルデザインの考え方を提唱した。

※4 大阪府文化振興研究会

梅棹忠夫、司馬遼太郎、宮本又次等からなる研究会であり、一九七四年の「大阪の文化を考える」等でチャージ・ディスチャージ論が主張された。地方公共団体が文化政策の主体として自立する必要性が示唆され、地方公共団体における文化行政の所管が教育委員会から首長部局へ転換するきっかけとなつた。

※9 しづおかユニバーサルデザイン行動計画

静岡県は、ユニバーサルデザインの考え方をいち早く県政に取り入れた地方公共団体である。企画部内にユニバーサルデザイン室を設置し、ユニバーサルデザインの考え方を県の施策、事業の中に具体的に取り入れ、計画的かつ体系的に実施するための行動計画を二〇〇〇年一月に策定した。

※10 くまもとユニバーサルデザイン振興指針

熊本県は、ユニバーサルデザインを県民運動として展開していくことをめざし、研究会やシンポジウム活動のほか、ユニバーサルデザインに関するホームページを立ち上げるなど、総合的な取り組みを推進している。本指針は、その一環として二〇〇二年二月に策定された。

※11 小暮宣雄（こぐれ のぶお）

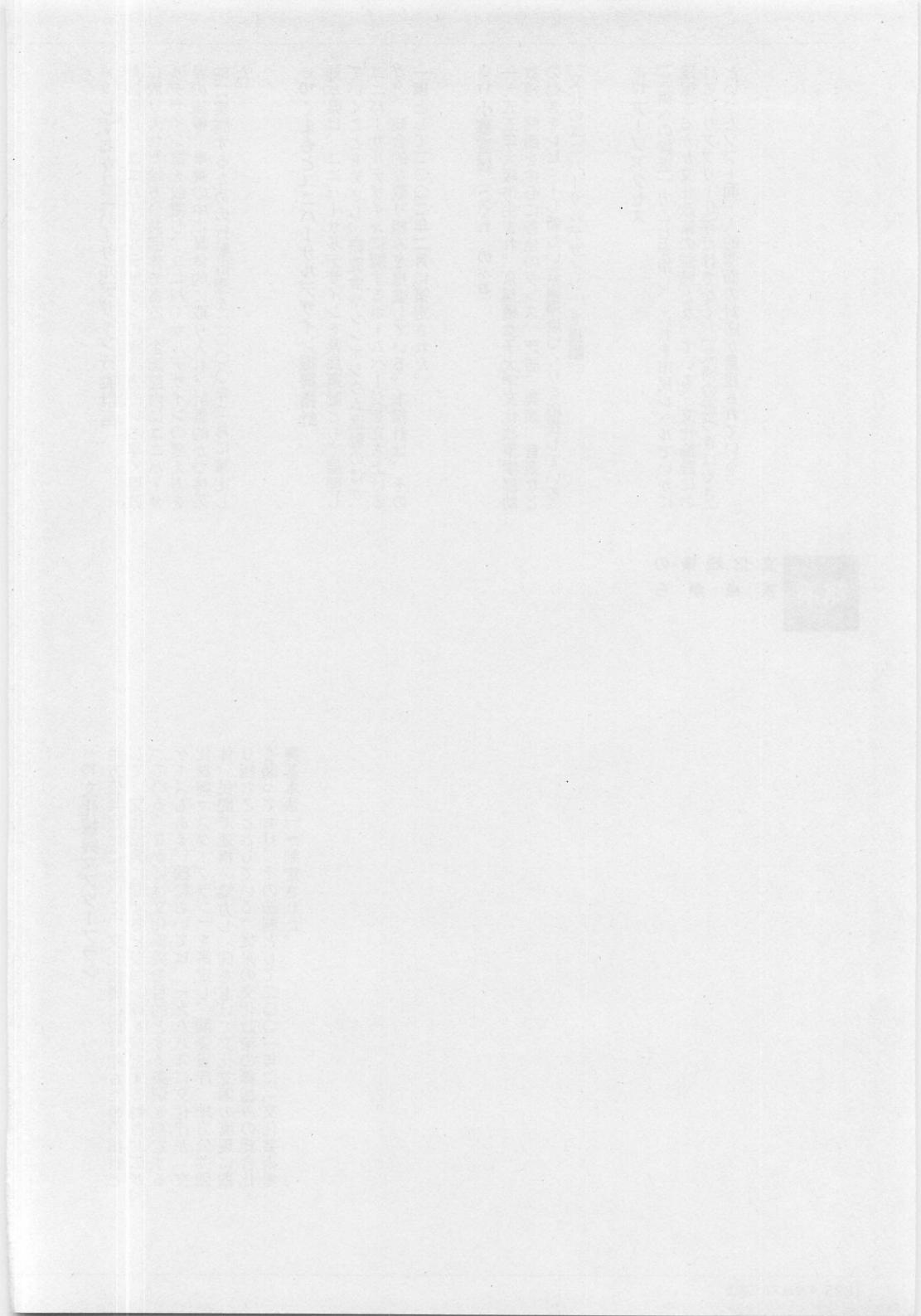
一九五五年大阪市生まれ。京都橘女子大学文化政策学部助教授。関西を中心に各地のダンス、芝居、美術、音楽などの動きをレビューし新しい芸術環境づくりを応援している。「文化的ユニバーサルデザイン」を提唱。

※12 アーツアクセス

「芸術への接近」のことを指し、これを市民レベルでいかに確保するかが文化政策の課題となつていて。文化施設におけるバリアフリーアクセスだけでなく、「芸術の近づきにくさ」といったソフト面・人的側面の対応が重視されている。

※13 文化振興マスター・プラン

地方公共団体において、文化振興に取り組むための指針として、文化振興に関するビジョン等を策定する動きが広がっている。なかには文化振興を目的とする条例を制定するケースもある。国においては、一九八八年に文化庁が「文化振興マスター・プラン」を策定し、関係省庁、地方公共団体、民間で連携・協力し、国をあげて文化立国の実現に取り組むこととしている。従来の文化政策の枠組みの総合化を図つており、その法制として二〇〇一年に「文化芸術振興基本法」が制定された。



トータル・ディスカッション

3 部

新しい知と、新しい美を語る

1部と2部の内容をふまえ会場のみなさんからの質問をうけて、市民社会とアートの共創について議論を深めます。
そこから「新しい知と、新しい美」のありようがみえてくるのではないでしょか。

- | | |
|-----------|---------------------------|
| 田 野 智 子 | (ハート・アート・おかやま) |
| 上 西 利 二 郎 | (宮崎市教育委員会 文化振興課主査) |
| 栗 原 彬 | (明治大学教授・政治社会学) |
| 西 尾 真 治 | (UFJ総合研究所 芸術・文化政策センター研究員) |
| 長 田 謙 一 | (千葉大学教授・芸術学) |
| 播 磨 靖 夫 | (エイブル・アート・ジャパン常務理事) |



司会

ここでは、エイブル・アート・ジャパン常務理事の播磨靖夫をコーディネーターに、第一部を代表して田野智子さん、第二部の講師を務められた長田謙一さん、栗原彬さん、上西利二郎さん、西尾真治さんとともに、今日一日を振り返り、講演内容の整理と会場のみなさんからの質問にお答えしたいと思います。そして、会場のみなさんからいただいたテーマをもとにディスカッションをいたします。

播磨



市民による新しい芸術運動、エイブル・アート・ムーブメントが一九九五年にスタートしました。その翌年からから始まつたトヨタ・エイブルアート・フォーラムの強力な推進力によつて、瞬くうちに日本中に広がり、海外でも評価され、現在ではエイブル・アートの名前を使って表現活動をする人々が出てくるほどになりました。運動として大変うまくいった例と言えるでしょう。

さて、新しい世紀を迎える、日本だけでなく世界全体が大きく変わろうとしています。さまざまな変化のなかでも注目したいのは、人間の意識の変化です。二十世紀では、モノにおいて成長を遂げるという時代でした。しかし、二十一世紀を境にして、とりわけバブル崩壊後から日本人の意識は大きく変わつてきました。それは、新しい知性、新しい美、魂の深さにおいて成長を遂げていくことに意味を見出す人たちが増えてきているということです。今日、この会場へ来られた方々もそういう方々ではないでしょうか。

それはまた世界的な現象でもありました。エイブル・アート・ムーブメントはそういう変化と重なって展開してきました。エイブル・アートがさまざま面で問題提起をし、揺さぶりをかけ、ずらしを起こし、さらにつなぐということを行つて。今日のフォーラムでは、その変化の仕方を長田さん、栗原さん、西尾さん、上西さんのさまざま視点から分析が行われ、提言もありました。

「エイブル・アート」というネーミングをし、運動の提唱者である私の活動に対しても、肯定的な人々

もいますが、拒否的な反応をする人、さらには拒絶反応をする人さえいます。芸術系の人々は「播磨は芸術がわかつていらない。そんなやつが芸術の世界に足を突っ込むのはおかしい」とまで言います。その通りかもしれません。ただし、私自身は芸術をわかつていなることをわかつています。ですから、アーティストをはじめ、芸術以外のさまざまな分野の人たちとも組んで運動しているわけです。

「アートは自分たちの専門分野であるから」というのが、芸術至上主義者の姿勢です。また、そのような考えの人は、障害のある人とアート活動を行つてている人のなかにもいます。一方、福祉の分野の人たちからは「福祉の分野に変なものを持ち込んだ」と、異端視されています。

芸術の分野からも福祉の分野からも冷たくされ、孤独のうちに生きていると思っていましたが、今日のフォーラムを聞いてずいぶんほつとしました。さまざまな分野の方々からエイブル・アート・ムーブメントは重要であり、分野を超えた活動が非常にいいと言つてもらいました。安堵とともにたいへん勇気づけられました。そして、ますますやるぞという

気持ちになつた次第です。

これからは、短い時間ですが、第二部で講演された四人の方と第一部のリレートークで発表された田野さんと一緒に進めてみたいと思います。まず、田野さんに第二部の感想を伺つてみましょう。

田野



アートは、自己実現のツール、自分らしさを表現できるツールであると同時に、言語、

ツールとしてのアートは、自己実現のツールでもあります。アートを通して社会による潤いを与えられ、潤いを与えられていくなかで私自身が潤つて生きていける。そこに、非常に大きなパワーを秘めているということに気づかされました。

私のように現場をずっと回つていて、スキルを追いかけてしまいかがちです。しかし、今日の第二

部でキーワードになつたのは「ユニバーサリリー」という言葉です。カタカナにすると聞き流してしまいがちですが、日本語では「あまねく」と訳すことができます。「あまねく」という言葉は行政でよく使

われますが、行政とは一体何をしているところなのでしょうか。もう一度なぜという疑問に立ち返つてみたくなります。皆さんと話を進めていくなかで、それらを追求したいと思つています。

播磨

それでは、四人の方に会場のみなさんの質問がありますので、取り上げてみたいと思います。まず、「あまねく」のところから、上西さんにお願いします。

「あまねく」を実行する、公平一律が行政の原則です。「どんこや」の例のように、一団体に行政が支援をしていくことに對して、他の団体からのねたみがあるなど、公平さを欠くのではないかと言われることが多いでしようか？

上西

第二部で紹介しました支援（66ページ参照）に関しては、いずれにしても公的な制度です。地域文化活動の補助事業



などは、公募のもと審査会を経て決定しており、ま

た作業所運営補助についても、担当部署が一定期間の活動実績をもとに支援を開始しています。公平か不公平かということではなく、「どんこや」の場合、長年の積み重ねのなかで、徐々にではありますが、役割が評価されてきているのではないでしょうか。

播磨

一般論ですが、行政の政策と合致すると、特色のある活動をしている団体に対する支援は必ずしも公平一律にはなりません。そのような団体に支援することで、他の市民活動を底上げすることを狙つてい場合があります。

イギリスのボルトン美術館でエイブル・アート・

フォーラムを開いたときのことです。参加していたイギリスの障害者アートのディレクターとアーティストが、場外乱闘をするわけです。アーティストは「私たちはアートだけでは食べていけない。経済的に大変なのだ。しかし、障害のあるアーティストたちは、豊富な援助があり、恵まれている」と。つまり、イギリスでは障害者アートは政策的に手を打た

れているということです。

実は、今日この会場にもお見えのアメリカのクリエイティブ・クレイの人たちから話を聞いて驚いたことがあります。いま、彼らの活動であるアートリンクが注目を浴び、あちこちの美術館から企画を持ち込まれ、展覧会の提案をしているということでした。

その背景の一つに、ADA（障害を持つアメリカ人法）^{**2}があります。障害者を差別してはいけないという強力な法律です。その法律は美術館にも適応され、企画の何パーセントかは障害者アートを入れなければならないということなのです。そのため、クレイには多くの美術館からのアプローチがあり、提案が求められているということです。

日本では、考えられない話です。そういうた政策が良いか悪いかは別とし、公共政策の一つとして障害者アートを捉えられ、支援されているのが海外の流れだと思つていいでしよう。

「人は人に所有されず、所有もしない」ということについて、もう少しお話をしてください。



ケアということを考えると、わかりやすいでしょう。ケアやボランティアにおいて、自分の身体の立ち方を考えてみてください。人をケアすることはどういったことなのか。ボランティアとして他者と向き合うときの身体の立ち方はどうであるのか。

それを考えると、哲学者の鷲田清一（一九四九）

さんの「関心を持つてその人を宛先として立つ」という言葉を借りたいと思います。その人に関心を向ければ、べつたりにならない。非常にうまい言い方をしています。べつたりになるということは、一方が他方を吸収してその存在を消すということ。同化はよくありません。

関心を持たずに宛先として立たないと、逆に「排除する」「無視する」ことになります。いずれにしろ、「支配する」「所有する」ことに関係します。距離をおいて、しかし関心を持つて立つことで、宛先になる人が本来持っている力を開いていくことです。これが、ケアやボランティアの基本なのです。

ボランティアは、人を支配することや所有すること、他の人と同化することではありません。ですから、「所有しない」「支配しない」ということは、ケアやボランティアでの自分の身体の立ち方の核心になるのです。そこから、考えていただくとわかるかと思います。

複合的な文化政策の具体例を教えてください。

西尾



まさに、その具体例の一つがエイブル・アートであり、エイブル・アート・ムーブメントであると思います。同様に、福祉分野やコミュニティ分野等と複合的に捉える文化政策の例としては、「アーツ・アクセス」などが挙げられます。また、「パブリック・アート」や「アーティスト・イン・レジデンス」などは、まちづくりと結びついた文化政策の例といえると思います。

第二部の繰り返しにもなりますが、福祉にさえ予

算をつけられないのに、文化に対して予算をつけることは行政としていいのかと問われる場面を多く受けます。行政の立場として不公平ではないかと。

そのようなときこそ、「複合性」「総合性」がキーワードになります。文化を振興することのみを目的とするのではなく、文化を起点として人の豊かさや豊かな生活に向けて政策を進めるべきなです。さらに、その総合性というなかで、地域の資源をいかに活用するかという工夫が必要であり、それを通じて独自性やアイデンティティを確立していくことが、地域の政策においては重要になります。

播磨

エイブル・アート・ムーブメントの一環として、私たちには「芸術とヘルスケア」という活動を推進しています。アメリカでも「アーツ・イン・ヘルスケア」という名称で同じような活動がなされています。最近得た情報では、スウェーデンでも、政府が資金を出して美術館のキュレーターを中心に五ヶ年計画で芸術とヘルスケアの調査を行っています。

いずれも、ヘルスケアにおけるアートの役割、ア

ートのポテンシャルをそれらにどう活かすかという活動です。このような活動は、欧米では複合的な文化政策のなかで取り組まれています。日本のアートのキュレーターが社会問題に目を向けているでしょうか。少ないのでしょうか。

しかし、スウェーデンなどは、政策としてアートとヘルスケアの問題にしっかりと取り組んでいます。スウェーデンだけでなく、イギリス、アメリカ、オーストラリアにおいても政策として取り組んでいます。日本では、その例は少なく、私の知る限りでは長野県諒訪市がアートとヘルスケアを結びつけた政策を展開している程度です。

今年一月、国際交流基金とブリティッシュカウンシルの共催で「市民社会とアートの共生」というシンポジウムが行われました。イギリス人のメンバーが行った基調講演は、大変反響があつたということです。その後、メンバーと意見交換しましたが、それが縁で今秋に行われる芸術とヘルスケア協会のシンポジウムには、イギリスでアートとヘルスケアの分野を研究している人たちも招くことを考えていました。

これから日本でも政策としてヘルスケアのなかでアートを取り込んでいこうという新しい動きが少しずつ生まれてくるでしょう。子ども、高齢者、女性、マノリティなどさまざまな問題のなかにアートを取り込む動きが非常に活発になってきているからです。行政も目を向け始めている分野ではないでしょうか。

エイブル・アートは、今日の話のように幅広い分野で取り組まれていますが、ICT（情報通信テクノロジー）をエイブル・アートと結びつけて行う方向なども考えられないでしょうか？

長田



もちろん、充分すぎるほど

可能ですし、イギリスやアメリカ、日本でもインターネット等のテクノロジーを用いて

エイブル・アート的な展開は現に充分始まっていると思います。

私たちも、新しい試みとして障害者アートと、デジタルテクノロジーと合体した新しいアートコンテストの開催を予定しています。アートも新しいアプローチをするべきだと思っています。

一方、人間の存在の謎に迫る「存在と生活のアート」も研究し、さまざまなアプローチを行っています。その一例が、昨年十二月に大阪の倉庫跡の美術館を使って展開した「ひと・アート・まち」です。たとえば、物を解体するのが好きな知的障害者の

「作品」を展示しました。彼女の親や施設の職員たちは、そういった行動を問題行動だと捉えています。

播磨

しかし、彼女には壊す理由があり、機械のなかの大

切なもの、機械にある「魂」の部分へのこだわりが

あります。彼女の破壊するという行動には非常に深

い意味があるのです。このような彼女の行動をコラ

ボレーションとして撮影しつづけた若手のアーティ

ストは、そのビデオを編集したのち音響をつけて
「ひと・アート・まち」で放映をしました。

また、別の若手アーティストは、障害のある人の日常生活をビデオや写真などに撮影して展示をしました。つまり、二人とも「存在と生活のアート」を見せてくれたのです。これらも、情報通信テクノロジーと障害者アートとのコラボレーションではないでしょうか。私は、新しい感性を持つた人が福祉の分野にどんどん参画することを願っています。

アートというと、「額縁台座」主義で、これしかないという考え方があります。そのような考え方人々は、絵を描かせることや絵画教室などの制作がアートだと思っているようです。そうしたものに限定せず、芸術のもつ最大限のポテンシャルは、現在生きている人間たちへ「生きる」意味を考えさせるきつ

かけを与えてくれることとして捉え、そして、人間の存在の謎、存在のあるがままの神秘性などを追求していくことも必要ではないでしょうか。

西尾

いまの話においてのＩＴとは、アートに直接活用するテクノロジーという意味で使われています。しかし、質問された方はいみじくもＩＣＴという言い方をされました。この場合のCとは、コミュニケーションのCです。情報通信技術のなかで、特にコミュニケーションにおける活用に着目した呼称として、ＩＣＴという語が使われます。

市民芸術活動を述べるときには、コミュニケーションを非常に重視します。通常コミュニティといふ、地域が単位です。芸術活動は、当然、生の体験がありますから、地域がベースになります。ところがＩＴが発達すると、そういうリアルのコミュニティだけではなくネットワーク上でコミュニケーションを行なうバーチャルコミュニティの側面が強くなつてくるのです。そのようなバーチャルのコミュニティでは、時間や空間の制約を超えて、共通の趣味や関心

といったものでつながり、ネットワークを通じてコミュニケーションを行います。ICTの発達によって、こうした活動はより活発になっていくでしょう。たとえば、離れた地域にある団体間でさまざまなノウハウや知恵を共有することができるようになります。そういったことがバーチャルの世界で活発になり、リアルな世界での活動にも生かされる。こうしたバーチャルとリアルの相互作用のなかで、ムーブメントがより活発となっていくでしょう。

既存の公共の文化施設（美術館、博物館、文化会館など）を、市民協働によつて箱もの行政からどのように変革できるのでしょうか？市民から行政への働きかけのコツがあるならば、教えてください。

上西

現在、箱ものについてのありが問われてきてります。日本は、ほとんどの小さなまちに文化ホールがあります。そういう施設は、全国で大変な数になるでしょう。これは、世界的に見ても非常にめずらしいケースです。

そして、いま、こういった文化施設の運営が、問題になつてきています。このような施設の多くは行政機関の直営か、または財團等により運営している場合がほとんどです。この場合の課題点は、第一に行政職員が施設に出向しているなか、着任後三、四年で出向元に帰りますので、たとえ事業をスタートしても、発展性が生じにくいと言われています。職員のもつ人的ネットワークが事業推進に大きな役割を果たすわけですが、それが、白紙となり、新しい職員がゼロからのスタートとなるわけです。つまり、本格的なプロデュース能力を有した人材が育ちにくい環境であるということです。

第二は、施設運営や施設実施の企画等において、市民を巻き込む形が取れていないケースが多いということです。市民のなかには優れた専門性や文化事業に関わりたい、支援したいという意欲を有した人材は数多く存在しているのですが、充分に活用されていないということでしょう。その課題への対策として、まず専門職、アートマネジメントを担当する職員を配置することです。これは、宮崎市も平成十四年度から一名採用しています。

次がご質問のことにつながるわけですが、経営能力を有した人材とアートマネジメント能力を有した人材を配置したNPO等が、市民を積極的に巻き込む形で運営していくという方式です。安定した運営のもと、市民の能力や意欲を大いに活かして、地域に根ざした本格的なプロデュースを展開していくのです。

そのためには、行政機関の運営委託が必要となつきます。全国的に行政機関のなかで事業評価

への取り組みが推進されているとともに、厳しい財政のおり経費削減が求められるなか、この方式はいずれ脚光を浴びてくるものと私自身は考えております。

このことに取り組みたいというグループがいれば、まず外部の人を含めて研究会を発足させ、運営のあり方を研究していくのはどうでしょうか。行政との信頼関係が必要ですから、発足後は文書で担当部署に経緯を報告しておくとよいと思います。次は、具体的な数字のもとに、具体的な計画を立てていくのです。これは、行政機関もかなり情報公開が進んでいますので、正式ルートで申し出れば、現状の数字も非常に詳しく把握できるでしょう。そして、適

宜、行政機関に経過報告し、最終的に提案書を提出してはどうでしょうか。この際に大切なことは、現在の政策に対する批難や批判をするのではなく、現状の取り組みも評価しながら、提案していくという姿勢が大切だと思います。

西尾

要するに、箱もの行政という言葉で象徴されながら今まで進んできたものをどう見直していくかという課題だと思います。今までつくってきたものをどのように活用していくかということに、政策なり関心なりのウエイトが移ってきてます。美術館などの文化施設について、本来の目的は何かということを明らかにし、それが実際の効果としてどうであつたのかという政策評価により、その運営を管理していく動きが強まっているのです。

その評価主体としては、行政における担当部署が中心になることが想定されますが、外部の専門家などによる評価の導入も求められています。特に、地域における公共施設は、その主たる利用者である地域住民における受益と負担の視点からの評価が重要

となります。そこで、市民や利用者を対象とした満足度調査を実施し、それを施設運営の成果を計るアウトカム指標として活用することが行われます。

こうしたことにより、間接的に市民が文化施設の運営に関わることになるといえますが、さらに一歩進んで市民が直接評価に参加する外部評価の仕組みの導入を働きかけることも考えられます。その際には、NPOと地域住民との連携により、第三者機関を設置することも、有効な手段として考えられるでしょう。

長田

既に、いろいろな実験的な試みが日本で進んでいます。私が、直接関わってきたものは、千葉県の佐倉市立美術館において毎年夏に「体感する美術」展を市民参画で企画しています。これが既にこの館の伝統をつくってきました



た。二〇〇三年度はさらに新しい展開を示そうとしています。しかし、これまでのところ、この種の企画はまだまだ、パイロット的な段階にあつたと言えるでしょう。しかしながら、今後五年から十年の間に民間のNPOがコアになり、箱もののさまざまな行政機関を実質的に動かしていくムーブメントが民間のなかにつくられるでしょう。そういう状況が急速に日本でも実現していく期待と予感を私は持っています。それをどのように実現していくかという点、新しい動きに対する提言的な能力が大学や活動をはじめているNPOに求められているのです。その意味では、エイブル・アートが開いてきた新しい地平というのは非常に刺激的です。必ずしもエイブル・アートと同じ目的を持たないグループであつても、既にできている箱ものを有効に活用し、新しい時代を拓くという点で、

大きな激励をエイブル・アートから得ているということは広く認められるのではないでしょうか。

播磨

いまの提言が重要なのですが、市民側にも問題があるということを話したいと思います。かつて、高知県立美術館の館長さんが私のところに相談にきました。障害者アートに取り組んできたいが、大変苦労しているということでした。というのは、各障害者団体が、それぞれの独自性を「主張」するそうです。一口に身体障害といつてもさまざまです。視覚障害、聴覚障害などそれぞれの団体が、主張を申し立てるのだそうです。つまり私たちの文化は別なのだと。

そうなると、公立の美術館としては公平一律を実行しなければならない。各団体の「主張」を認めようとすると、



作品発表会しかできません。これでは、アートを求める県民から失望の声が聞こえます。このような問題をどのようにクリアしていくべきかという相談でした。

市民の側がそういうものをどう超えていくのか。問われるのは市民の側の美意識や問題意識です。障害のある人の作品すべてをアートとみなし、美術館に並べたところで認知されないでしょう。団体別にスペースを取り合って展覧するのはアートではありません。

私は何度も大きな展覧会をプロデュースしましたが、それぞれの独自性を「主張」する障害者団体の調整にへどへとなるほど疲れました。そのあたりが、障害者アートがもう一步踏み出せない問題ではないでしょうか。

知的障害、精神障害、肢体不自由などさまざまな障害区分があります。しか

も、それぞれ問題が別であるかのように扱われがちです。もし、エイブル・アート・ムーブメントが既存の価値観をくずし、人々を幸せの方向へ誘うならば、どのような他の動きと連携できるでしょうか？

田野

お答えになるかわかりませんが、ハート・アート・おかげまでは、さまざまな分野で活動している人たちが集まって会を構成しています。会の代表は、以前は福祉施設の常務理事がしておりましたが、現在は岡山大学の彫刻の先生が務めています。そして、会員は、美術家、教育関係者、福祉や行政の職員という領域の異なる人たちです。要は、それぞれの領域のバリアを越えた人々の集まりであるということ。そこに意味があると考えています。

さまざまなワークショップでの現場で起こる交流や活動をみてみると、アートサポーターとして参加する若者は、その人らしさを引き出そうと懸命に動き回り、ハイな気分に一緒になってくれます。時間と空間をつくる活動に対して奔走してくるのです。一方、福祉施設から利用者の方を連れて来ています。

る職員は、その人の幸せのためという別の目的で参加します。学校関係者になると、今やっているワーキショップが自分の現場に帰つてどのように生かせるかを探りに来ます。さまざまな方がさまざまな目的で集うわけです。

つまり、お互いに目的は異なつても集える場をセッティングすることで、他の価値観がそこへ導入されます。自分とは異なる価値観や育て方をするのが一番効果的ではないでしょうか。

私たちも、アートセンターを持ちたいという夢はあります。まだそこまでに至つていません。どちらかというと、押しかけていってはワークショップをするインディペンデント・ワークショップグループです。また、活動の場として工業高校のデザイン科や福祉関連の部門がある学校を選ぶことで、ボランティアとして関わる高校生や大学生が学習をしていることの意味を知るチャンスにつながると思います。障害のある人の存在そのものが、他の人にとつて効果的な相互作用を及ぼす現場をつくることを目的として活動し、その人らしい幸せや出会いを新たに生み、そしてそれが新たなムーブメントを生むと解

祝しています。

播磨

いま田野さんの言つたことは重要なことです。アートセンターという大きな施設をつくつてそこに来ることを促すのはよくありません。身近にアートに親しめる環境があることがより重要なのです。アーティセンターのような大きな施設をつくることにどのくらいの意味があるのでしょうか。矛盾しているようですが、私たちも今秋から本格的なアートセンターをつくる予定です。日本はモデルを示さないと理解してもらえないでの、建設することにしました。予定通り建設されれば、日本で最初のコミュニティアートセンターとなります。

立派な施設をつくればいいというものではない例を話しましよう。神奈川県横浜市にラ・ポールという施設があります。障害者のアートセンターであり、スポーツセンターです。横浜市は莫大な資金を投資してつくりました。横浜の障害者的人は恵まれていると思つていましだが、実は問題が山積しているようなのです。「ラ・ポールができるから、地域から

障害者が消えてしまった」ということをスタッフが話していたのを聞いたからです。これは非常に大きな問題です。

アメリカの障害者のアートセンターは、NPOによつて運営されています。その一つであるクリエイティブ・グロースは、カリフォルニアのリッチモンドにあります。まちの真中で家具屋さんがあつた広々としたビルを使い、地域のさまざまな人が気軽に来ることができるようにしてしています。また、サンフランシスコのクリエイティブ・エクスプロードは、なんとキャバレー跡を利用してたのです。実際に地域の人と密着しているわけです。

箱ものの話がありましたが、日本は行政がつくるとなると、非常に巨大なものやモデルとなるものをつくるうとします。そして、その地域の障害者たちは送り迎えをしてもらつてその施設を使うという構図になります。このようなことは、あつてはならないことです。まちのなかにいつでも創作活動ができる環境をたくさんつくることのほうが重要なのです。

私と市民団体とのあいだで、「い

播磨

***⁹

ま、大学を活用しない手はない」という話題がよく出ます。特に、一部の大学では独立行政法人として大変な変革を求められています。大学の存続がかかっているわけです。そのなかで、生き残りのためのキーワードが地域との密着です。緊迫した状況ですから、大学の先生方も意識を強く持っています。

こういったなかで自分たちの活動している分野に関係する教官にアプローチをかけて、ネットワークができれば、有力な知的ブレーンを得ることができるのではないかでしょか。地域とのつながりが薄い先生は、

栗原さん
一つは、大学の中に市民に来てもらうということです。また逆に大学関係者が地域へ出て行くということです。その両方が今は必要でしょ。

栗原さん
私はほぼ十年にわたって、毎秋、大学の政治社会学演習の学生たちと、山形県の先駆的な有機農業の里、高畠町に四泊五日の援農合宿に出かけました。もつとも援農といつても援けていただくのは学生の方ですが、つながることで徐々に専門性も活かせる状況になつてくると思います。その専門性と学生たちの持つパワーは大きな魅力・戦力になつていきます。



そのノウハウを直接的に活かすのは難しいでしょが、つながることで徐々に専門性も活かせる状況になつてくると思います。その専門性と学生たちの持つパワーは大きな魅力・戦力になつていきます。

またある年には、私たちがお世話になつた有機農業

学生たちに忘れない印象を残します。少なくない

家たちが、大学のキャンパスを訪れ、関心のある講義や演習に参加されました。

市民が大学に来て、大学を活用する機会を広げる必要があります。大学外にはいろいろなフィールドがあります。ですから、エイブル・アートでもいいし、美術館への市民参加でもいい。大学の専門知と市民社会の教養知の交流ばかりでなく、双方が協力して互いを生き生きさせる野生知を構築することを考えたい。

大学と地域住民が協同して地域づくりに取り組むことができます。和歌山大学と和歌山市貴志地区の住民が一体となつた産廃中間処理場反対運動は、全国的に異例の建設不許可処分を実現しました。この運動を通じて、大学は、大学も市民社会の一部であること、住民は市民自治と市民の学問の重要性を互いに学んだものです。

先ほどの専門知と関係がありますが、大学内では学部の壁というのが

問題です。相変わらず、蛸壺状態です。おそらく、そういういた蛸壺状態がいろいろな組織のなかで一番強いのは大学ではないでしょうか。これを壊さないと、変革はできません。

加えて、教授職と大学職員との間での身分差があることが挙げられます。これは非常によくあります。学生と頻繁に接触する職員も非常に多いのです。大学職員と教員との間のバリアフリーも行わなければなりません。このように、大学内で行わなければならぬこともあります。



播磨

第二部の栗原さんの

講演では、野生知という言葉が出ましたが、いまの質問で考えたのは専門知の問題です。今日は、エイブル・アートの可能性をさまざまテキストのなかで検証していくプロセス

をみなさんと共有しました。このようなことは現代社会では少なく、大学などは狭いところで専門知がそびえ立っている構図に市民側からは見えてします。このあたりについてはどうでしょうか？

長田

専門的な知や文化は、学問や文化が発展しようとする際に、不可避的に必要だったわけです。

しかし、先ほどから話題になつてゐる地域と大学との連携で最も本質的な問題になるべきことは、大學の地域サービスや、生涯教育講座の開講といったレベルにとどまる問題ではありません。

地域あるいは現実の世界が提起している具体的な問題に、大学が拓き蓄えてきたさまざまな知や術が現実が提起する新たな問題にどのように答えうるか、あるいはまたその現実の突きつける批判にどのように耐え、また組みかえしていくかということだと思います。

現実は常にトータルにあるわけです。つまり、分析され、分析されて現実があるわけではありません。しかし、それを分析するために学問が個別化、細分化されながら進みます。その細分化の進度によって分析はより精緻に試みられることになります。けれども、その分析は現実のなかでこそ、その実が問われます。そういう意味で、おっしゃる通り、大学が築いてきた細分化された専門知の体系を現実の前に問い合わせる必要があります。

西尾

創作活動や団体が自立的な活動をしていくためにいかに財源を確保していくかということに置き換え

て話をしたいと思います。

たとえば、エイブル・アート・ムーブメントは、企業との関係がうまくいって、そこから活動資金が出ています。一方、そこに行政がなかなか関わらないという難しい問題があります。そういうなまでは、欧米に見られますように、マッチンググラントといわれるような方法が考えられます。団体が経営基盤を確立していくために、企業からの助成金を得ることができた場合に、それを条件として行政からも助成金を得られる仕組みです。すでに企業メセナなどの取り組みが先行している分野では、こうした補助金の出し方を行うことにより、行政は触媒としての役割を効果的に果たすことができます。このように団体と企業及び行政が連携する形が一つの可能性として考えられることから、今後行政において検討・導入が進むことが期待されます。

播磨

エイブル・アート・ムーブメントの展開で、いま、障害者アートに関心が高まり、作品そのものが売れていく状況があります。なかには、作品がスターバ

ックスのコーヒーショップのデザインに大きく取り上げられるという展開をしているところもあります。その結果、経済的な問題が解決されているかといふと、そうでもありません。

先日、奈良で「福祉施設におけるアート化セミナー」と題して三日間合宿形式のセミナーを開催しました。これには、全国各地からの参加者がありました。ただ、作品をつくるだけではなく、経済性を重視して作品が売れていく、当事者に帰っていく。あるいは運営資金に使われていくというマネジメントも重視しなければならないことです。福祉の現場では、物をつくることに関心は高いのですが、売るという発想がありません。そのような意識を改革し、作品を売るることを考えることも大切です。

また、純粹な芸術活動としてしっかりと保存していくことも必要です。その辺の基盤整備をすることも不可欠です。マネジメントの分野は、非常に関心が高く、さまざまな人たちが学びつつあるところであります。その結果、マーケットができるのですが、こういった厳しい経済の時代に障害のある人の作品を買うというコレクターはまだまだ日本では少ない

わけです。それよりも、二次使用としてデザインへの転用などの策はたくさんあります。デザインの要素として取り入れられ、新たなクラフト製品も産まれています。

このような状況を踏まえ、私たちは新しい試みとして「美と用のあいだ」コンクールを企画しています。特に知的障害のある人の作品は、美と用のあいだに位置するものがほとんどうです。これを評価し、附加価値をつけていくこと。さらにマーケットにもつながる展開も試みる予定です。

エイブル・アートが展開して約八年ですが、まだまだやらなければならないことはたくさんあるのです。しかし、今日ここで、総合セッショングという一区切りの段階で多方面の方に来ていただき、さまざまな角度から示唆にとんだ提言や方向性を出していただいたことを感謝しています。

田野さん、今までのところで何かありますか？

田野

クリエイティブ・クレイの人たちを呼んでシンボジウムを岡山でしたときに感じたことがあります。

クリエイティブ・クレイは、女性の方たち二人が力を合わせて設立しました。設立当初は、発起人が若い女性であるということで、だいぶ偏見があつたそうです。しかも、半年間は無給であつたし、持ち出しもあつたと。ところが、何年かたつてみると、潤沢な運営資金が手に入るようになつたそうです。

つまり、それなりの段階を踏みながら、自分たちのしたいことをアピールしていく力を彼女たちが持っているということです。加えて、地域社会、地域のアーティストを巻き込み、クリエイティの高い美を追求しつづけています。こういった点を私たちがこれから学ぶ必要があるかと思います。

障害があるからこの程度でいいと限界を決めてしまつたなら、発展はありません。本当にその人が幸せになるためのアートとは何であろうか、とさまざまなかたちを見つめるサポートが必要になります。そのような人を増やし、誰もが幸せになることを心掛けるべきでしょう。それぞれの幸せに少しでも近づけるために、エイブル・アートがパワーを今後も發揮していくのではないかと思います。

最後にまとめたいと思います。長田先生がおっしゃるように、いま大きな変革の時代です。そのなかで、これまで枠組みとなっていたものをふくめ、さまざまなものを再定義していくことが求められています。

エイブル・アート・ムーブメントをつくる際に、芸術というものを再定義しました。「芸術とは、個人または集団にとって、その取り巻く日常的状況をより深く美しいものに変革する行為である」と。

コンセプトをつくる際に学んだのは、宮沢賢治の『農民芸術概論』でした。宮沢賢治は、そのなかで「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と述べています。エイブル・アートは、宮沢賢治の精神を表した『農民芸術概論』から非常に大きな着想を得て展開してきました。

この非個人の悲しみに対し、私たちが真摯に向き合うことこそが、よりよい生に向かうことにつながるのではないかと思っています。そして、これが、エイブル・アート・ムーブメントの大きな

会に対し賭ける、あるいは、混迷した世界に対して賭けるということが、いま、芸術に求められていくことだと思います。悲しみや苦しみを持ちながら生きている人たちを前にして芸術は何ができるのか。美術のなかだけで閉じこもり、アウトサイド、インサイドに分離するのが、どれほどの意味があるのかが問われているのだと思います。

これをポストモダンの非情芸術といつてもいいでしょう。この非情芸術の非情とは、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という宮沢賢治の思想と通じるものがあります。それは、何かというと、インパーソナルソロー、非個人の悲しみにどのように向き合うかということです。

彼の述べていることは、殺伐とした現代社会にお

※1 クリエイティブ・クレイ

アメリカ・フロリダ州にある障害のある人のアート活動を推進しているNPO。「アート・リンク（障害のある人とプロのアーティストの）」という斬新なプロジェクトを推進している。

※2 ADA (American with Disabilities Act)

アメリカ合衆国の障害者法。一九九〇年七月に障害に基づく差別の明確で包括的な禁止を確立するための法律として成立した。その基本精神は「障害を持つ人々に対して公民権と平等な機会を保障する」というものである。この法律は雇用、交通、公共交通施設、TTY(Teletypewriter)を一つのシステムとして障害者にとってバリアのないアクセスを保障するものである。

※3 パブリック・アート

公園や市街地などの公共空間に恒久的に設置される芸術作品、あるいはその設置計画の総称で、「公共芸術」とも言われる。地方自治体等がクリエイントとなり、アーティストに新作の制作を委嘱することが多い。近年、全国各地で町おこしや景観事業としての「パブリック・アート」が展開されている。

※8 アーツ・イン・ヘルスケア

行政としていくらかけてどれだけしたか、という投入量（インプット）や結果量（アウトプット）ではなく、住民にとってどうなったか、という成果（アウトカム）を表す指標のこと。

医療や福祉などのヘルスケアの現場にアートを取り入れていくこと。アメリカにあるアーツ・イン・ヘルスケア学会では、心身の健康のケアにおける芸術の応用に取り組んでいる。

※9 日本ボランティア学会

一九九八年十一月、「経験知を科学する」という問題意識のもとに設立。「ボランティアの能力を高めること、その社会的なイメージを高めること」を目標とし、自律と協働に基づく経験を知の体系に織りなし、その知の力を実践に戻すことを趣旨に掲げている。

※5 芸術とヘルスケア

奈良にある財団法人たんぽぽの家が、二〇〇〇年にアートのむつ

ている人間に与える力に着目し、芸術とヘルスケア協会を設立した。生活をより深く美しく、豊かにしていく行為そのものをアートとしてとらえ、「芸術」という言葉の意味も問い合わせながら、人ととのつながりのなかで自分の存在を恢復させていくことができるような社会をめざしている。

トヨタ・エイブルアート・フォーラムの概要と軌跡

フォーラムの目的

私たちには、障害のある人たちの芸術活動には、障害のある人が自らを表現することで、自分が自分になつていく力があること、さらには社会の既存の価値観を揺さぶる大きな可能性があるという二つの側面に着目しました。そこで、「障害のある人たちの芸術活動に対する理解促進」と「豊かな創造活動のための環境づくりと人づくり」を目的に、一九九六年から二〇〇三年までの七年間にわたり、トヨタ・エイブルアート・フォーラムを開催してきました。

フォーラムの内容

各地で地域に根差した独自の活動が展開されることを目標に、基本的に各地域三年間のプログラムを用意しました。一年目は、障害のある人たちの芸術活動への理解を促すことを目的とした「シンポジウム」。二年目は、活動を

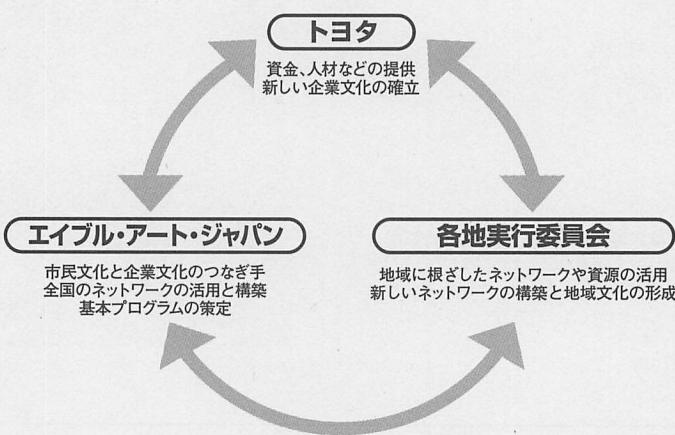
定着させるための、創作や展示に関するワークショップやマネジメントについて考える「アートサポーター入門講座」。三年目は、同フォーラムを契機として、各地実行委員会が地域独自の課題や問題を解決するための自主企画に対する支援です。

実施体制

トヨタとエイブル・アート・ジャパンと、各地で福祉やアート、教育など多様な立場の人たちからなる実行委員会を組織し、この三者が一体となって運営になりました（下図参照）。こうした連携の結果、それぞれの強みや特徴をいかした効率的な活動ができたと言えます。NPOにとつては、企業のリソース（資金・人材・施設など）の活用ができ、企業にとつては、NPOのリソース（専門知識をもつた人材・固有の情報・ネットワークの活用と多様な価値観の導入による新たな企业文化の確立ができました。

これまでの実績

二〇〇三年年三月末までに三十四地



域、計六十三回のフォーラムを開催し、福祉関係者、美術関係者、教育関係者、障害のある人の家族、学生、地方自治体関係者など、約七七〇〇人のご参加いただきました。また、「知恵藏」（朝日新聞社）、「現代用語の基礎知識」（自由国民社）にも「エイブルアート」が美術の用語として取り上げられるなど、認知度の向上に大きな影響を与えました。

さらに、二〇〇一年十二月には、（社）企業メセナ協議会が主催する「メセナ大賞二〇〇一バリアフリー賞」を受賞するなど、トヨタ・エイブルアート・フォーラムは、企業とNPOのパートナーシップによる先駆的事例として、各方面から非常に大きな注目を集め、研究対象ともなりました。

評価

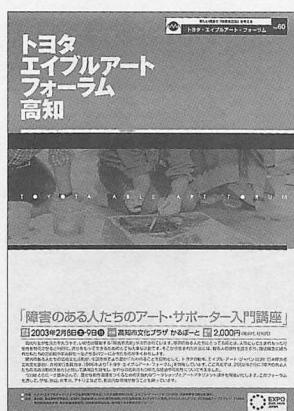
全国にエイブル・アート・ムーブメントの「種」をまくために、当フォーラムを開催してきました。その結果、多数の「芽」は、独自に「根」を張り、「ツル」をのばし、地域に応じたさまざまな活動を展開しています。

全国にエイブル・アート・ムーブメントの「種」をまくために、当フォーラムを開催してきました。その結果、多数の「芽」は、独自に「根」を張り、「ツル」をのばし、地域に応じたさまざまな活動を行っています。

障害のある人たちが表現活動を中心に行う福祉作業所を立ち上げた人、障害のある人も参加できるアトリエを始めた人、ギャラリーを始めた人、実行委員会がアートNPOへと発展しワークショップを開催したりまちづくりの活動とりんくしたり、その取り組みは多岐にわたりっています。このたび、七年間のしめくくりとして実施した「総合セッション」でご紹介した活動は、そうした多様な拡がりのほんの一例です。

また、今回のフォーラムを通じて、エイブル・アート・ムーブメントには、アートの枠組みを組み替える可能性があること、文化政策の中に位置づけることで、社会の新しいあり方を提案する力になりうることなど、「市民社会」とアートの関係を紡ぐ上で大きな可能性と役割があることが明確になりました。

「芸術の社会化、社会の芸術化」をキーワードに、一人ひとりのちがいを尊重しあい「個の実現」をめざすこのムーブメントに参加する人たちが更に増え、全国各地で多様で豊かな文化が生まれ育つことを願っています。



1996年度

シンポジウム 6地域

地域	開催日	講師	参加者
東京都 ●千代田区	3月30日(土)	ジュリア・カセム、西垣籌一、西村陽平、高橋直裕、林里絵、播磨靖夫	180名
広島県 ●三原市	11月15日(金)	エリアス・カツ、谷村雅弘、岡崎清子、清水啓一、長恵、播磨靖夫	120名
兵庫県 ●神戸市	11月20日(水)	エリアス・カツ、西垣籌一、はたよしこ、服部正、播磨靖夫	180名
熊本県 ●熊本市	11月23日(土)	エリアス・カツ、西村陽平、岡崎清子、岡本美津代、播磨靖夫	100名
北海道 ●札幌市	11月28日(木)	ジュリア・カセム、西村陽平、岡崎清子、尾形香三夫、播磨靖夫	170名
青森県 ●八戸市	11月30日(土)	ジュリア・カセム、岡崎清子、清水啓一、東信昭、播磨靖夫	160名



1997年度

シンポジウム 7地域

地域	開催日	講師	参加者
長野県 ●長野市	9月28日(日)	西村陽平、岡崎清子、服部正、関孝之、播磨靖夫	130名
徳島県 ●徳島市	10月11日(土)	山下勝也、はたよしこ、服部正、安藝正憲、播磨靖夫	90名
京都府 ●京都市	10月25日(土)	ジュリア・カセム、西垣籌一、岡崎清子、播磨靖夫	60名
沖縄県 ●那覇市	11月30日(日)	山下勝也、西村陽平、岡崎清子、山城見信、播磨靖夫	150名
鳥取県 ●米子市	12月9日(火)	山下勝也、はたよしこ、岡崎清子、山田晋、難波賢治、播磨靖夫	210名
石川県 ●金沢市	12月14日(日)	西垣籌一、岡崎清子、服部正、中井義二、播磨靖夫	110名
宮城県 ●仙台市	98年1月17日(土)	西垣籌一、はたよしこ、服部正、佐藤静、播磨靖夫	150名

ワークショップ 3地域

地域	開催日	講師	参加者
北海道 ●札幌市	9月20日(土)	サイモン順子、はたよしこ、播磨靖夫	40名
青森県 ●八戸市	12月7日(日)	サイモン順子、はたよしこ、播磨靖夫	80名
兵庫県 ●神戸市	98年2月1日(日)	サイモン順子、はたよしこ、播磨靖夫	50名



1998年度

シンポジウム 6地域

地域	開催日	講師	参加者
山形県 ●山形市	10月31日(土)	サイモン順子、服部正、鈴木孝美、信夫菊雄、播磨靖夫	110名
岩手県 ●盛岡市	11月14日(土)	はたよしこ、関根幹司、服部正、三井信義、播磨靖夫	100名
栃木県 ●足利市	11月29日(日)	南明容、平田健生、長崎剛志、安藤重之、播磨靖夫	150名
宮崎県 ●宮崎市	12月6日(日)	山下勝也、平田健生、黒木房子、坂元金一、播磨靖夫	180名
静岡県 ●静岡市	12月18日(金)	サイモン順子、関根幹司、服部正、池田トイ、播磨靖夫	110名
長崎県 ●長崎市	99年1月16日(土)	難波昌子、平田健生、山下完和、野坂知布、播磨靖夫	110名

ワークショップ 4地域

地域	開催日	講師	参加者
石川県 ●金沢市	10月20日(火)	サイモン順子、藤野忠利、播磨靖夫	60名
徳島県 ●徳島市	11月8日(日)	サイモン順子、藤野忠利、播磨靖夫	70名
宮城県 ●仙台市	11月14日(土) 15日(日)	齋正弘、サイモン順子、服部正、播磨靖夫	120名
鳥取県 ●米子市	12月10日(木) 11日(金)	サイモン順子、藤野忠利、服部正、播磨靖夫	100名

特別フォーラム「新しいアートの胎動」

地域	開催日	講師	参加者
東京都 ●台東区	99年3月13日(土)	栗原彬、高橋直裕、はたよしこ、森田ゆかり、服部正、播磨靖夫	250名



1999年度

シンポジウム 6地域

地域	開催日	講師	参加者
新潟県 ●長岡市	8月22日(土)	はたよしこ、関孝之、服部正、ひめかわゆり、播磨靖夫	100名
愛媛県 ●松山市	9月19日(土)	はたよしこ、平田健生、山下完和、合田史彦、播磨靖夫	90名
福島県 ●郡山市	12月11日(日)	はたよしこ、関根幹司、服部正、高澤俊郎、播磨靖夫	130名
岡山県 ●岡山市	00年1月16日(日)	はたよしこ、角田大龍、服部正、渋谷奈津子、播磨靖夫	170名
神奈川県 ●横浜市	00年3月4日(土)	はたよしこ、関根幹司、平田健生、蔭山ヅル、播磨靖夫	210名
福岡県 ●福岡市	00年3月12日(日)	西村陽平、平田健生、酒谷佳子、山下完和、播磨靖夫	170名

ワークショップ 5地域

地域	開催日	講師	参加者
山形県 ●山形市	8月28日(土) 29日(日)	サイモン順子、藤野忠利、服部正、播磨靖夫	90名
岩手県 ●盛岡市	10月30日(土) 31日(日)	はたよしこ、藤野忠利、服部正、播磨靖夫	140名
宮崎県 ●宮崎市	11月20日(土) 21日(日)	齋正弘、サイモン順子、服部正、播磨靖夫	110名
栃木県 ●足利市	11月28日(日)	サイモン順子、藤野忠利、播磨靖夫	50名
長崎県 ●長崎市	00年2月11日(金) 12日(土)	サイモン順子、藤野忠利、服部正、播磨靖夫	90名

自主企画 2地域

地域	開催日	内容
青森県 ●八戸市	12月5日(日)	「障害のある人との芸術活動担当者スキルアップ講座」
鳥取県 ●米子市	12月13日(月) 14日(火)	「新しいアーティストをつくるためのワークショップと、映画と講演会」



2000年度

シンポジウム 5地域

地域	開催日	講師	参加者
群馬県 ●前橋市	9月3日(土)	西村陽平、角田大龍、関根幹司、服部正、播磨靖夫	150名
奈良県 ●奈良市	11月12日(日)	西村陽平、高澤俊郎、服部正、柴崎由美子、播磨靖夫	180名
愛知県 ●名古屋市	12月17日(日)	はたよしこ、服部正、山下完和、百瀬亜紀、播磨靖夫	90名
広島県 ●広島市	01年1月27日(土)	はたよしこ、服部正、山下完和、長恵、播磨靖夫	150名
山梨県 ●甲府市	01年3月25日(日)	西村陽平、関孝之、服部正、伊藤美輝、播磨靖夫	80名

ワークショップ 6地域

地域	開催日	講師	参加者
福島県 ●郡山市	11月25日(土) 26日(日)	高澤俊郎、はたよしこ、服部正、播磨靖夫	160名
岡山県 ●岡山市	12月2日(土) 3日(日)	はたよしこ、藤野忠利、服部正、播磨靖夫	140名
新潟県 ●長岡市	01年2月10日(土) 11日(日)	サイモン順子、藤野忠利、服部正、播磨靖夫	90名
神奈川県 ●横浜市	01年2月17日(土) 18日(日)	高澤俊郎、藤野忠利、服部正、播磨靖夫	130名
愛媛県 ●松山市	01年2月24日(土) 25日(日)	サイモン順子、はたよしこ、服部正、播磨靖夫	100名
福岡県 ●福岡市	01年3月17日(土) 18日(日)	サイモン順子、はたよしこ、服部正、播磨靖夫	120名

自主企画 3地域

地域	開催日	内容
石川県 ●金沢市	00年10月6日(金) ~12日(木)	「手でみるかたち」展
	00年10月6日(金) 7日(土)	「西村陽平造形ワークショップ」
岩手県 ●盛岡市	00年11月18日(土) 19日(日)	エイブル・アート・フォーラム盛岡「アートに高める」 障害をもつ人たちのアートサポーター実践講座 (ワークショップと講座)
宮崎県 ●宮崎市	01年1月28日(日)	「平田オリザ演劇ワークショップ」

2001年度

シンポジウム 4地域

地域	開催日	講師	参加者
千葉県 ●船橋市	8月26日(日)	西村陽平、はたよしこ、柴崎由美子、播磨靖夫	100名
大阪府 ●大阪市	11月18日(日)	はたよしこ、関根幹司、野村寿子、播磨靖夫	160名
高知県 ●高知市	02年2月3日(日)	はたよしこ、関根幹司、織田信生、播磨靖夫	150名
静岡県 ●浜松市	02年3月10日(日)	関根幹司、柴崎由美子、久保田翠、播磨靖夫	200名

ワークショップ 5地域

地域	開催日	講師	参加者
群馬県 ●前橋市	9月15日(土) 16日(日)	はたよしこ、藤野忠利、服部正、播磨靖夫	70名
愛知県 ●名古屋市	3月10日(土) 11日(日)	サイモン順子、藤野忠利、服部正、播磨靖夫	80名
奈良県 ●奈良市	02年1月26日(土) 27日(日)	はたよしこ、藤野忠利、服部正、播磨靖夫	110名
山梨県 ●甲府市	02年2月9日(土) 10日(日)	藤野忠利、南明容、石塚雅子、播磨靖夫	70名
広島県 ●広島市	02年2月23日(土) 24日(日)	サイモン順子、藤野忠利、服部正、播磨靖夫	130名

自主企画 3地域

地域	開催日	内容
山形県 ●山形市	01年11月2日(金) ～4日(日)	「夢のまんま。展」—アート・喜びとその可能性へ— (公募展、相談会) 映画「遠足」上映会
岡山県 ●岡山市	01年12月11日(火) ～16日(日)	エイブル・アート・フォーラム岡山2001 「アートが世界を変えていく。」(展覧会、ワークショップ、ギャラリートーク)
福島県 ●郡山市	02年3月8日(金) ～16日(土)	「見えるもの・見えないもの ～こころのかたち～」展 (展覧会、ワークショップ)



2002年度

ワークショップ 4地域

地域	開催日	講師	参加者
千葉県 ●船橋市	03年1月11日(土) 12日(日)	サイモン順子、中津川浩章、石塚雅子、播磨靖夫	110名
高知県 ●高知市	03年2月8日(土) 9日(日)	サイモン順子、中津川浩章、石塚雅子、播磨靖夫	90名
静岡県 ●浜松市	03年2月15日(土) 16日(日)	関口怜子、野村誠、片岡祐介、菅野潤一、播磨靖夫	90名
大阪府 ●大阪市	03年3月21日(金) 22日(土)	サイモン順子、中津川浩章、石塚雅子、播磨靖夫	90名

自主企画 5地域

地域	開催日	内容
奈良県 ●奈良市	「地球遊戯」(連続ワークショップ、活動報告展) 02年11月17日(日) 02年12月14日(土) 03年1月26日(日) 03年4月9日(水)	つくろう! 100%地球タイル みんなでどろんこ染め 感じる土のチカラ・いのちのカタチ 活動報告展
沖縄県 ●那覇市	03年1月25日(土)	「障害をもつ人たちの創作活動の場つくり」 (創作会・アートサポーター体験、アートサポーター講座、創作活動の場つくり講座)
新潟県 ●長岡市	「障がい者のためのアート・フォーラム・イン 長岡」 障がい者アートの魅力とその可能性」(講演会、パネルディスカッション、展覧会) 03年2月22日(土)	講演「ほんとうに たいせつなこと」 パネルディスカッション「障がい者アートの魅力とその可能性」
神奈川県 ●川崎市 ●横浜市	「本人アンケート わたしにとっての芸術とあなたにとっての芸術に関するアンケート調査」 03年3月22日(土) 03年2月22日(土) ～3月28日(金)	巡回公開 巡回公開
福岡県 ●甘木市	03年4月19日(土) 20日(日) 03年4月16日(水) ～5月25日(日)	「廃校の教室で自然からだも語らうアートと縁 と… ～人と人、人と自然、芸術と縁～」(九州 のネットワーク作りを目的とした事例報告、パネル ディスカッション、交流会など) 「ここからなにかがはじまるin共星の里」(展覧会)

総合セッション 「アートは社会の未来への投資」

地域	開催日	スピーカー・講師	参加者
東京都 ●港区	03年3月15日(土)	久保田翠、梶原紀子、宮田美光、田野智子、 井ノ口和子、高橋夏樹、長田謙一、西尾真治、 上西利二郎、栗原彬、播磨靖夫	170名

アートは社会の未来への投資

新しい価値の創造にむけて・市民社会と企業のコラボレーション

発行日 2003年7月
発行 トヨタ自動車株式会社

〒112-8701 東京都文京区後楽1-4-18
TEL.03-3817-9139 FAX.03-3817-9036
<http://www.toyota.co.jp/mecenat/>

エイブル・アート・ジャパン

〒164-0003 東京都中野区東中野4-4-1 ポレポレ坐ビル3F
TEL.03-3364-2140 FAX.03-3364-5602
<http://www.ableart.org>

表紙デザイン 水川史生
本文デザイン 鈴木大助
撮影 福田依子(会場)
校正 法橋 量
編集 柿沼市子 秋山浩子
印刷・製本 トヨタ自動車株式会社

© 禁無断転載

